
魔王子復讐記

おかむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王子復讐記

【Nコード】

N5383Y

【作者名】

おかむ

【あらすじ】

魔王サタンが倒され存亡の危機に立たされた魔族。

正義と悪、魔族と人間、相反する二つが交じり合って混沌とした世界を舞台に魔族の再興と勇者への復讐を果たすべく、残された魔王子ルシファアの旅が今はいよいよ！

深まる謎？ 真実の答え？ 分からない事だらけでも歴史は止まってくれない。

友との出会いと別れを繰り返し、果たしてルシファアは勇者への復讐を果たす事が出来るのか？

復讐系ファンタジー。

001 (前書き)

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。
指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものであります。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

「カンヘル。右前方、注意！」
「御意。」

ルシファアの言葉にカンヘルは応えると、拳を前に突き出して突進してきた衛兵を弾き飛ばす。

「ルシファア様っ。」

後方より突進してきた長槍兵を素早い一撃で牽制したニヤルは再び距離を取って、周囲を警戒する。

ここは ゴルジディアンの森。

かつては 古種ゴブリン族 の聖地として栄えた地ではあるが、人間の前線支援基地があるために、周囲の廃墟とは違い、衛兵達が駐在していた。

「しかし、ここまで多いとは。」

「弱気だなんて珍しいにゃ。」

「なっ!? 弱気などではない。」

カンヘルとニヤルのやり取りには反応せず、ルシファアは詠唱を破棄し右手を衛兵達に差し向ける。

同時に周囲を取り囲んでいた衛兵達が青白い炎に包まれた。

ポチャノボン は任意の対象を青白い炎で包む火炎系初級魔法だ。

断末魔の叫び声を上げて地面をのた打ち回る衛兵達を見ながら、ルシファアは背中の大剣を引き抜いた。

そして躊躇無く刃を突き立てていく。

叫び声は途絶え、次に鮮血が地面を赤黒く染め上げていく。

ルシファアが無尽蔵に思える程の魔力を有しているとはいえ、万が一の危機に備えて魔力を節約することは重要であった。

とは云ってもルシファア程の魔力をもつてすれば初級魔法の一つや二つでは、その顔色一つ変える事さえあり得ないわけだが。

「前方より弓兵！」

「了解っ！」

「はいにやつ！」

それに万が一魔法が使用できない状況になつたとしても、今のルシファーにはふたりの友がいる。

「防御結界 イージス ツ！」

両の腕を前方へと向け構え、結界系初級魔法を発動した鎧の戦士はカンヘル。

岩の体と温厚そうな眼差しを持つ大柄な男で、ルシファーとは旧知の仲である。

種族は 岩人族。

大柄な体躯で敵の攻撃を一手に引き受ける強固な防御能力を持ち、かつての戦場においては不沈要塞の異名を誇っていた。

「……遅いにゃ！」

そのカンヘルの防御結界で弾かれた矢を見て怯んだ弓兵達の隙を、猫耳の少女が突く。

近接戦闘の備えを持たぬ弓兵達は仕方なくその手に持った弓を振りかぶるが、彼女は構えた刃で、駆け抜けざまに斬り捨てた。

黒い尻尾を風に漂わせる小柄な少女はニヤル。

ルシファーの事を様付けで呼ぶ彼女もまた、ルシファーの友人である。

種族は 猫耳族。

小柄な身体と素早い身のこなしを特徴とし、その動きは二足歩行が可能な魔族では地上最速とも云われる。

その二人の動きを見ていた、ルシファーは再びゆっくりと前進する。

ルシファーの種族は 魔人族。

魔族最高とも名高い魔力と明晰な頭脳を誇り、数多の大魔術師を輩出している。

中・遠距離戦闘では魔法、近接戦闘においては魔剣と呼ばれる魔力で強化した固有の武器を持って敵を殲滅する完全な魔法攻撃特化

種族だ。

だが魔法攻撃に特化した種族の宿命として物理防御力は心許無い。カンヘルの頼りがいのある岩の皮膚はともかくとして、ニヤルのような素早い身のこなしもルシファーには出来ない。

かと云ってルシファーがカンヘルのような全身鎧を着けることは無い。

魔族の辞書に「防御」の言葉は無い。

数多の戦場における彼らの先祖からの教訓は「殺られる前に殺れ」だ。

だからと云って物理防御力に乏しいルシファーが戦場で孤立する事は望ましくない。

いつ敵の奇襲を受けるか分からない状況を考えると、背後からの奇襲を警戒しながらカンヘルやニヤルと一定の距離を離れずにいる方が得策である。

勿論この ゴルジディアン の森 はそこまで重要性の高い前線支援基地があるわけではない。

現れる衛兵達もルシファーに奇襲を加える程の手だれや高度な魔法を駆使する魔法使いなどではない。

ルシファー達三人はそれぞれが一軍の将を務める程の高位の魔族だ。

尤も今やその一軍すら存在しないのが魔族の現状ではあるが。

いくらルシファーの物理防御力が低いとは云え、これだけ実力の差があるとそうそう奇襲を喰らうようなこともない。

そもそも、カンヘルは敵が多いと云うが、三十程度の一般兵など、三人の内誰だって、一人で殲滅する事が出来る程度の数である。

(とはいえ、この程度の兵だからだが。)

先ほどから、口では余裕を見せているカンヘルやニヤルだが、その表情はどこかこわばっている。

戦闘、そして殺傷というのは恐ろしいものだ。

いくら優れた肉体と能力を持っていて、圧倒的に戦闘を進め

られるとはいえ、敵と対峙するのは恐怖と緊張感を伴う。

襲い来る兵士も、それを受け止めるのも、そしてそれを殺すのも、全て自分自身で為さねばならない。

前線でそれらに対処し、止めを刺すというのは、想像以上に精神力を要する。

それらを乗り越えるためには、場数を踏むしかないだろう、というのがルシファアの出した結論である。

「右方っ！」

「了解っ！」

焦りの表情で汗を滴らせながらも、ルシファアの声に素早く反応して、カンヘルは右腕を叩き付けた。

その一撃は、当たり前こそしないものの、長槍兵への牽制にはなつたようだ。

身の丈ほどの長槍を構えた衛兵は、動揺とあからさまな敵意が入り混じった眼差しを向けながら、二歩程後退し距離をとった。

この一撃もそうであった。

ルシファア達は一軍の将を務める程高位の魔族だ。

本来であれば、こんな前線支援基地の衛兵程度の相手に攻撃を失敗するなど、考えられない。

こんな所にも、経験の不足が見て取れる。

身体と能力がいくら高位の戦士であっても、今はその力を十分に発揮出来ていない。

「マイシユテルンッ！」

それなら確実に敵を殲滅出来る術を選ぶべきだと考えたルシファアは、広範囲に効果のある魔法を詠唱した。

マイシユテルン は任意の対象の動きを鈍くする氷結系中級魔法だった。

周囲を囲んでいた衛兵達の身体の一部が氷漬けになる。

とはいえ、致命傷には至らない。

そもそも氷結系魔法は攻撃よりも妨害に向いている魔法が多く、

大きなダメージは与えられない物が多い。

その証拠に、ルシファアの放った魔法を喰らった衛兵達は動きこそ鈍ってはいるが、その敵意は確実にこちらに向いていた。

「さすが我が主。おりゃああああ！」

動きが鈍った衛兵達をカンヘルが両の腕を振り下ろし、地面に叩きつけていく。

「感謝するにや。ハアツ！」

残った敵もニヤルが素早い一撃で斬り捨てて行く。

倒れていく衛兵達の断末魔とは対照的な二人の明るい声が響く。

戦争の経験の無いルシファア達にとって、まだ難しい戦闘だがその能力差は明確だ。

その動きが鈍ったとあれば、あとは接近して、一撃を見舞わせるだけである。

「フンツ！これで十五人目。」

「こつちは十七人目にや。」

「ぬっ……やりますな、チビ猫殿!？」

「チビ猫って云うにやー！でくの坊っ！」

元来、暗い事を考える二人ではない。

温厚で忠義に厚くタフなカンヘルと、そのカンヘルを軽口と冗談で手玉にとるニヤルだ。

きっかけとちよつとした手助けがあれば、次々と衛兵達を倒し始める。

ルシファアの狙いは最初からこういつた部分にあった。

あとは二人が止めを刺し損ねた敵に、背負った大剣を突き立てていくだけでいい。

今相手にしている敵はルシファア自身が強力な攻撃魔法や大剣を開放して攻撃を加える必要はない。

考えて見ればなんとすることはなく、それはこれまでの修行と教え通りの基本的な戦闘に違いなかった。

(しかし、どこまでこの力を使わずにいけるか。奴はこの程度の雑

兵とは格が違う。奴だけではなく、他も侮れない。(

ルシファアはそんなことを考える。

「ハッ！私の獲物だ！」

「あげないニヤ！」

戦場とは思えない楽しそうな声。

カンヘルもニヤルもルシファアが目的を果たすために行動を共にする旧知の友だ。

今まで厳しい修行をこなしてきた彼らならきっかけさえ掴めば、躊躇や戸惑いは消える。

「これで、最後ですか？」

カンヘルが両の腕で衛兵を地面に叩き付けて尋ねる。

ルシファアが考え事をしている間に戦闘は終結していたようだ。

ルシファアはその言葉に頷きながら、両手をカンヘルとニヤルに向ける。

「ああ。情報によればこの前線支援基地の兵員は五十四名。こいつで最後だ。」

ルシファアは詠唱を破棄し回復系初級魔法 ヒルン を発動する。

カンヘルとニヤルは殆ど攻撃を受けていないが、念には念を入れた形だ。

「ありがとうございます。」

「ニヤル、いつぱい倒したにゃ。」

ルシファア達は初陣に勝利した。

ルシファアは最初の戦場としてこの ゴルジディアンの森 の前線支援基地を選んで正解だったと思う。

たった数度の戦闘の中で、これ程格下の相手に対し幾度も攻撃を失敗した。

後半は完璧とも云える戦局の展開に成功したが、最初から中規模以上の拠点や基地を襲撃していたら戦況は変わっていたかもしれない。

幸い、陽はまだ高い。

「今日はここでキャンプにしよう。」

前線支援基地だけあって、ここで一夜を過ごすには充分すぎる備品や食料があった。

「ニヤルは一応周囲を警戒してくれ。カンヘルは寢床の準備。俺は料理を。」

「了解。」

「わーい！ルシファア様の手料理だにや！」

カンヘルは基地という名の木造の建屋に入り使えそうな寝具を探す。

ニヤルはルシファアの手料理に歓喜しながらも、身を低く構え周囲の警戒に当たる。

ルシファアは厨房を拝借しシチューを作る。

三人の旅は始まったばかりだが、なんにしる彼らにとっては最初の勝利であった。

それは彼らの壮大な目的に比べれば小さな事に過ぎない。それでも今宵ばかりは楽しくありたいと願うのであった。

「ルシファア様ー、おいしいですよにや。」

猫舌のニヤルは頬を赤らめ、シチューを冷ましながら頬張っていた。

「うぬ。さすが我が主。誰かさんとは大違いだ。」

大食漢のカンヘルは今宵も匙の勢いが止まらない。

「おい！そのでくの坊……その誰かさんとは誰のことにやー！」

「心当たりがあると云うのなら、それで正解ですよ。」

「なんにやとー！貴様、レディーに向かってにやんと失礼にやー！」

「レディー？果てさて……どちら様の事でしょうか？」

「にやにやにやにやー！」

ルシファアは二人の応酬を横目にシチューを頬張っていた。

そして思い出していた……。

あの夜の出来事を。

旅立ちと大いなる復讐を成し遂げる事を決意した夜の事を。

001 (前書き)

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。
指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

雷鳴が轟き、ガラスの割れた窓からは豪雨が降り付ける。

絢爛豪華な造りを施された王の間は雨風と激しい戦闘によって、見るも無残な姿へと変貌していた。

アーシラト高原、魔王城最上階、王の間。

そこは比類なき魔力とそれを有効に活用する天才的な頭脳をもって、すべての魔族と束ねる王の中の王、大魔王サタンの社であった。十年前、ルシファーがまだ八歳の時の出来事である。

「嵐神バアル よ！その怒りをもって我らに勝利の輝きを！……ラピムヘビヨン ッ！」

ラピムヘビヨン は任意の単体に雷撃を与える風雷系の上級魔法である。

豊かな白い髭をその顎に蓄えた魔道士マフューは、嵐神バアルの庇護を付与され、さらに強化された一撃をサタンへと向ける。突如としてサタンの頭上に出現した雷撃は唸りを上げて空間を引き裂き、サタンに直撃する。

「ぐっ……。」

サタンはとつさに魔力を放出し、これを防ごうとする。

しかし防御結界ですらないただの魔力の放出で防げるほど、マフューの一撃は易しいものではない。

サタンの両腕は黒く焼け焦げ、皮膚の内側の筋肉を痛々しく露出していた。

それでも攻撃は止む事は無い。

「軍神アレス よ！我にその導きを授けたまえ！…… 英霊降臨 ッ！」

英霊降臨 は契約した英霊の力を任意の物体に付与する庇護系の上級魔法である。

全身鎧に身を包んだ戦士チェムは掲げた剣に 軍神アレス の力

を付与した。

軍神アレスの魔力を付与されたチエムの剣は神々しい光を放つ。

「サタン……覚悟しろ！うおおおお！」

チエムは掲げた剣を振りかぶりサタンに斬りかかる。

サタンも咄嗟に魔力を放出しその斬撃に対抗するが、チエムの剣が纏った軍神アレスの魔力はサタンの魔力を物ともせず破っていく。

魔力の刃はサタンに致命傷こそ負わせられないものの、一方的にサタンの身体を傷つけていく。

「くっ……嵐神バルに軍神アレスとは……恥を知れ人間共！」

魔力を放出しチエムの剣を必死に受け止めるサタンは勇者を睨みつけ、そう叫んだ。

「黙れサタン。英霊は貴様ら魔族だけのものではない。よもや忘れてたわけではあるまい？」

「勇者よ！貴様ら人間は、そうまでして魔族を討ち滅ぼさんと欲するか！？」

サタンが言葉を投げ交わした相手こそが人間世界の希望にして、魔族にとつての侵略者である勇者ニーシユ。

人間の身でありながら魔族の六王にも匹敵する魔力を有する天才であった。

「俺たち人間は弱い。悔しいが、こうでもしなければ貴様には勝てないっ！だが、覚えておけ……俺はお前達が行ってきた悪事を許さない。」

「何を訳の分からぬ事を！」

サタンとニーシユの言葉は噛み合わない。

魔族の頂点と人間の希望、それぞれに思惑と背負うものがある。

「幾千年もの間、我ら人間を狭く荒れた地に押し込めてきた罪を償うがいい！」

ニーシュの言葉にサタンは戸惑いを覚える。

(それは違うぞ……勇者。まさかこやつは何も知らないだけではないのか?)

今まで激しい戦闘を繰り広げてきた勇者一向と魔王サタン。

しかしサタンはその戦いのなかで初めて、一瞬の思考の鈍りを見せてしまう。

「サタンッ!とどめだっ!」

ニーシュは鞘から剣を抜くと天高く刃を掲げた。

「勇者ニーシュの名においてここに宣言する! 精霊王バハムート

よ、我が身体と血の盟約を交わし、その力を我が袂へと降臨したまえ!」

(ばかな!?)

サタンは驚愕した。

精霊王バハムート は英霊の頂点に君臨する四人の神々の一人であつた。

高位の魔族ですら数えるほどしかその庇護を受けることが出来ないと云われる精霊王から人間が庇護を受けるなど、考えられないことであつた。

突如、巨大な地鳴りとともに城内の灯火が大きく燃え盛つた。

それは火の精霊王であるバハムートの降臨を示す合図であつた。

近くにいる者でも感じられるほどの魔力がニーシュの構えた剣が紅く染めていく。

サタンほどの強者であつてもその魔力が自らの魔力を遥かに超えるものであることが容易に想像できた。

そしてサタンはその盟約を交わす機をニーシュに与えてしまったことに絶望した。

「サタン……貴様も分かっているだろう。精霊王の降臨は今この瞬間より、降臨した精霊王の力無くして成されない。」

サタンは勇者達を見縊っていた。

魔法の行使をここまで控え魔力の放出だけに留めてきたのは、土

壇場の最後の一手として精霊王の庇護を受けることを考えていたからであった。

「魔族最大の失敗は 精霊王バハムート の聖地を我が人間の地に残してきた事だ。今となつては貴様が 精霊王アーシラト の庇護を受けることすら出来ない。」

ニーシユの言葉にサタンは言葉を失う。

「返す言葉も無いか……。魔剣を持っていなかったのが運の尽きだったな。サタン……。貴様の命脈もここまでだ！」

ニーシユは紅く輝く剣と構えるとサタンに斬りかかった。

「はああああああ！！」

「ぐっ……。」

サタンは寸でのところで斬撃を交わそうとするが、膨大な魔力の刃はサタンの身体を容赦なく斬りつけた。

すると傷口から黒い炎が噴出す。

(これがバハムートの力が……。)

尚も容赦ない連撃が続く。

「はあ！てやつー！！」

その一撃が振り下ろされる度にサタンの身体から黒い炎が上がる。

(くっ……。もはや……。これまでか。)

サタンの身体はもはや限界であった。

燃え盛る身体で必死に斬撃を回避しようとするサタンであったが、もはや勇者に勝つ術は残されていなかった。

(だが、これで終わりにはさせません！)

サタンは死を覚悟した。

そして死の対価にふさわしい、魔族の頂点たる自らにふさわしい選択肢を選ぶ。

意を決し相対するニーシユを前に魔力の放出を止める。

次の瞬間、ニーシユの一撃がサタンの腹部を貫く。

「うっ……。」

引き抜かれる刃。

腹部から大量の血液が損なわれ、傷口を黒い炎が覆う。

生死を賭けた戦いが幕を下ろした瞬間であった。

だが、それとは別の……サタンの戦いが幕を上げた瞬間であった。

(くっ……間に合うか……)

止め処なく溢れ出る血と薄れゆく意識の中でサタンは最後の魔法を心の中で詠唱した。

残った魔力の全てを用いて、その詠唱を口にするをしなければならなかった。

詠唱の破棄はその魔力の量で可否が決まる。

今サタンが為そうとしている魔法は、彼以外の魔力をもつてして詠唱を破棄する事など出来なかった。

ニーシュに気づかれて対抗魔法を発動されることは許されない。

彼はその命脈が尽き果てる最後にその魔法を発動すべく、意識を集中していく。

その集中たるや王の間の背後の扉に潜む影の存在に気がつかない程であった。

ニーシュの一撃がサタンに突き立てられる四半刻前。

「坊ちやま……緊急事態です！落ち着いて話をお聞きください。」

アーシラト高原、魔王城最上階、後宮。

後宮は大魔王とその家族専用の居住空間であった。

そこに家族以外で立ち入る事が許されるのは、ごく一部の限られた執事だけである。

「うーん……トウイーニー？どうしたの？」

「坊ちやま、自体は一刻を争います。勇者一行が単身、王の間へと侵入しました。城の兵士は全滅、文官すら一人残らず殺される始末です。」

「!?!」

トウイーニーは魔王城の後宮で魔王王子付きのメイドを務めていた。種族は 妖精族。

魔族随一と評される女性の美貌が有名な 妖精族 は、メイドや踊り子などとして貴族階級に好まれる。

トウイーニーはその 妖精族 の中でも絶世と呼ばれる美貌を持つて後宮勤めを勝ち取っていた。

そして魔法や勉学の才を持って魔王王子の教育係まで務めていた。

「幸いサタン様が王の間で戦っておいでです。坊ちやまは一刻も早い脱出を。」

「父上が!？」

そしてトウイーニーが坊ちやまと呼ぶ少年こそ、大魔王サタンの息子にして次代の王の座を約束された才の持ち主である魔王王子ルシファーであった。

当時まだ八歳であったルシファーはあまりの出来事に動転する。

ベッドを素早く抜け出したルシファーはトウイーニーを無視して王の間へと走り出す。

「坊ちやま!?! いけません!」

トウイーニーもそれを止めるべくルシファーの後を追う。

「くっ……坊ちやま! 坊ちやま!」

後宮から王の間へはそう長くない距離であった。

子供の足でも五分とかからない距離であった。

ルシファーは王の間の扉へと手を伸ばす。

「坊ちやま!」

扉へと手が届く前にトウイーニーが追い着く。

「トウイーニー、離せ!」

「離しません!」

トウイーニーは断固たる意思を持って扉の前に立ち塞がった。

「そこを……どけー! ツンララン ツー!」

我を忘れたルシファーは魔法の矛先をトウイーニーへと向ける。

ツンララン は任意の単体に氷の刃を向ける氷結系中級魔法

であった。

鈍い音と共に氷の刃がトウイーニーの左目に突き刺さる。

トウイーニーは魔法の発動に気づきながら、それを避けようとしなかった。

「ぐっ……。」

彼女はルシファアの魔法を防げないほど無能でもなければ、ましてやそれをかわせないほど鈍くも無かった。

自我を取り戻したルシファアは自らの行いに動揺した。

「あっ……ああ……。」

言葉を失い、がっくりと膝を落としたルシファアは頭を抱えた。

「……坊ちやま……どうか気を確かに。今最も重要なことは……坊ちやまの命です。」

その言葉はサタンが破れることを意味していた。

今眼前の扉を開け、助けに参ずる事は即ち死を意味する。

そしてルシファアの死は魔族の希望を喪失することを意味する。

トウイーニーは全てを理解した上で苦渋の決断を下し、それをルシファアに促したのだ。

「サタン様は……もう助かりません。ですが、最後のお姿だけでも見て参りましょう。その後は力ずくでもここを脱出していただきませ。」

左目を抑えながらトウイーニーはルシファアを諭した。

「トウイーニー……俺は……。」

「大丈夫です。私はこの程度の傷では死にませんよ。」

トウイーニーは血で染まる顔で笑ってみせた。

「ごめん……なさい。」

「いいんです。さあ、サタン様の最後のご勇姿をしかとその目に焼き付けてください。」

トウイーニーは厚い扉を中の者に悟られないよう慎重に少しだけ開いた。

そこからルシファアは目だけで王の間を見渡した。

(父上!?)

眼前に飛び込んできたのは黒い炎の中に身を包み、膝を着き頭を頂垂れた父サタンの姿であった。

そしてその前に立つのは、見知らぬ人間の男……勇者ニーシユであった。

ニーシユは今まさに構えた剣でサタンの首を切り落とさんとする瞬間であった。

ルシファアは飛び出そうとする衝動を必死で抑えた。

「サタン……覚悟はいいか。」

「いいだろう。この首、貴様にくれてやる!だが忘れるな……死して尚、我魔王たることを……。」

「戯言を!死ねっ!」

ニーシユの一振りが振り下ろされるのと時を同じくして雷鳴が轟く。

「!?!」

サタンの最後の叫びは雷鳴に掻き消されルシファアには届かない。

(父上ッ!)

ルシファアは叫びたくなる衝動を抑え、その瞳をニーシユに向けた。

その顔を忘れぬために。

そして強くその心に刻み込んだ。

復讐を成し遂げる事を。

それを可能に出来るほど強くなることを。

睨み付けるようにニーシユを凝視するルシファアはある異変に気づく。

サタンの首を切り落としたニーシユがその場に倒れこんだ。

慌てて後方から、魔道士マフューが駆けてくる。

即座に回復魔法を詠唱を破棄し発動するが、ニーシユは動かない。

「ニーシユ!ニーシユ!!」

マフューの発動した回復魔法が効いていない様子であった。

「ルシファー様……参りましょう。これ以上は危険です。」
トウイーニーに諭され、名残を惜しみつつ後宮を後にした。
城を出た後、彼らは三日三晩、南方の アニユチララブマ山 を
目指した。

その間の記憶をルシファーはあまり覚えていない。

気づいた頃には、 アニユチララブマ山 の麓の名前も無い町の
近くの小屋にいた。

だがはつきりとしているのが、あの日父であり、魔族の王の中の
王サタンが殺されたという事。

勇者ニ―シユ、魔道士マフーユー、戦士チエムを殺し復讐を成し
遂げるといふ事。

そしてその事を アニユチララブマ山 の山中で固く誓ったとい
う事。

彼はこの十年の間に強くなった。

それはかつての大魔王サタンにも匹敵するほどに。

だが彼の大きいなる復讐の旅路はまだ始まったばかりであった。

002 (前書き)

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。
指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

「坊ちやま……お早うございます。もう、お目覚めでしょうか？」
扉一枚で隔てられた廊下からトウイーニーの声がする。

「ああ。もう起きてるよ。」
ルシファアはトウイーニーが起こしにくる半刻程前に目が覚めていた。

昔は部屋の中にまで押し入ってきて起こしにきていたトウイーニーも近頃は、部屋の前の扉越しに確認するだけになった。

惨劇が繰り広げられた夜から十年、決意を心に決めた夜から十年が過ぎ、ルシファアは十八歳の青年へと成長を遂げた。

背丈も百七十を裕に超え、幼かった声はますます低く、鋭くなった。

「朝食の準備が来ています。着替えがお済になりましたら、降りてきてくださいね。」

扉越しにトウイーニーはルシファアへ朝食を採ることを促す。

「ああ。すぐに行くよ。」
ルシファアがそう告げるとトウイーニーが階段を下っていく音がする。

寝巻きを脱ぎ捨てたルシファアはベッドの横に置かれた旅の支度を見下ろす。

（抜かりはないな。）

そう心の中で呟いて旅用の丈夫なパンツとシャツに袖を通す。

今日はルシファアと仲間達の旅立ちの日であった。

ルシファアにとっても、その友にとっても緊張の度合いに差こそあれど、あまり気分良い睡眠が送れたとは思えなかった。

それほどまでに彼らの旅の目的は困難を極め、そして何よりも壮大であった。

ルシファアは着替えを済ませ、部屋を出てリビングへと降りた。

「お早う。トウイーニー。」

「お早うございます。坊ちやま。」

いつもと変わらないトウイーニー手製の朝食が食卓に並んでいた。彼女が朝早くから焼き上げたパン、朝市に並んだ野菜のサラダ、新鮮なミルク。

最近でこそ旅に備え自炊を学び始めたルシファーであるが、朝は決まってトウイーニーの作る朝食を二人で食べる。

それがこの十年間変わらない二人のルールであった。

席に着いたルシファーにトウイーニーは温めたミルクを差し出す。

「ありがとうございます。」

「いえ。それではいただきますでしょうか。」

トウイーニーも席に着きいつもと変わらない二人の朝食が始まる。違うのはそれも今日で最後であるという事であった。

「やっぱり、行かれてしまつのですね……。」

トウイーニーはミルクの入ったカップを置くと寂しそうな表情を浮かべた。

「ああ。元より決めた事。」

ルシファーが勇者への復讐を決めた夜からちょうど十年。

ルシファーは自らの心に固く誓った決意の道を逸れることなく歩んできた。

「そうですね……寂しくなりますね。」

左目に眼帯を付けた 妖精族 のメイドの美しさは十年の年月程度では変えられない。

大抵の男であれば、そんな彼女の願いを反故になどはしないだろう。

それでもルシファーの決意は固かった。

「済まないな……トウイーニー。必ず目的を果たして帰ってくる。」

ルシファーは本心から出た言葉を口にする。

しかしそれはあくまで本心であって、根拠の無い願望に過ぎなかった。

実際には帰ってこれる保障も可能性も無いに等しかった。

「勇者は強いです。今の坊ちやまでも……。」

トウイーニーが口を濁した言葉をルシファーは理解していた。

勝てないかもしれない……殺されるかもしれない……。

そういつた不安はこの十年の修行で得た力をもつてしても、拭い去れる類の物ではなかった。

「わかつているさ。……それでも俺は行かなくちゃならない。」

食事の席を重苦しい雰囲気が漂う。

「そう……ですね。トウイーニーめは坊ちやまにお仕えた時から、いざれ離れる事を……覚悟しておりました。ですが……いざそうなってみるとこれ程悲しい事とは……思いもせませんでしたよ。」

トウイーニーはやや言葉につまりながら話を続けた。

「それでも涙をしまい……見送るのが私の務めでもありませんようか。」

トウイーニーの頬を一筋の涙が零れ落ちる。

しかしその顔は美しき妖精族の乙女の満面の笑顔に満ちていた。

「今までありがとう……。その左目の傷に固く誓おう。必ずやこの家に舞い戻り、勝利の報告と魔族の再興を宣言すると。」

「……はい。坊ちやまも……ご立派になられましたね。」

ボソツと呟いたトウイーニーの声をルシファーはあえて無視した。

(結局最後まで『坊ちやま』か。)

この十年間変わらない二人の主人と執事、師匠と弟子という関係は今日で終わりを迎える。

今日をもってその関係は、旅立つ者と帰りを待つ者になる。

余韻を楽しむかのように二人は最後の朝食を楽しんだ。

「そうれはそうと……坊ちやま達はこれからどちらへ？まさかいきなり勇者を探すという訳でもありませんでしょう？」

ルシファーにはいくつか候補があったが、中でも一番危険の少ない選択肢を選んでいた。

「まずは ゴルジディアンの森 の前線支援基地を攻めようと思う。そこから一番近い ゴルジディアン山脈 の地下城に赴き、ゴブリオン王に会う。」

「なるほど……。してその後は？」

「順々に大陸を巡り 六王 に協力を要請したい。勇者が魔族の地を離れている以上、まずは極東の魔王城、ひいてはその先の メルボー大橋 を越えない事には話にならない。それには 六王 の力が必要になるだろう？」

サタンの死後、魔族は混乱した。

元々一枚岩でなかった魔族は魔王という象徴的な権威を置くことでお互いの利権争いに終止符を打った。

それは数千年もの間変わらない常であり、それが次代の魔王を指名せずに突如没するなど考えられないことであった。

それが突如現れた勇者によってサタンは討たれ、押し寄せた人間の軍勢によって人間への防衛線であった メルボー大橋 を越えられるという事態を起こした。

元来魔族達が度々繰り返された 聖戦 に勝利出来た理由がこのメルボー大橋 の存在であった。

圧倒的能力差は勿論だが、メルボー大橋 を越える事は人間の領地との間にある 死の谷 を越える唯一の術であった。

数に勝る人間がいくらか大軍を率いて押し寄せようと、唯一つの橋を一度に渡れる人数は限られる。

魔族は橋を使って大規模戦闘を避けてしまえば、あとは能力の勝る魔族が少しずつ人間を殲滅していけば良い話だった。

それがどこからともなく魔王城に現れサタンを討ち、メルボー大橋を内から攻められるなどという事は誰も思いつかなかった。

そこに人間の大量軍が押し寄せられてはいくらか能力に勝る魔族もひとたまりもなく、メルボー大橋の陥落を許すことになった。

最大の防衛拠点の消失、指揮系統最高権力の喪失、情報の錯綜は大きな混乱を生み、結果 六王 はそれぞれの領地を自らの兵によ

つて自力で防衛せざるをえなかった。

なんとか大陸の極東部分を失う程度で人間の侵略を留める事に成功したが、その後の 六王 は互いに残された利権を争い対立しているというのが現状であった。

「おっしゃる通りです。しかし……坊ちやまが急に赴いたところで六王 がすんなりと服従するとは思えません。」

確かにトウイーニーの言うとおりであった。

魔族に出回った情報によれば、魔王城の住人は衛兵のみならず使用人や牛馬まで皆殺しにされたとなっている。

当然ルシファーも死んだと考えられている。

そんな中、魔王子を名乗る青年が現れたところで 六王 がおいそれと従うはずがない

「そうならば力づくで従えるまで、と考えているか？」

「それではなんの意味もありませんよ。力で従えた者たちがいざという時裏切ったり、或いは意気消沈としたりする事はよくある事です。」

またしてもトウイーニーの言うとおりであった。

しかし今のルシファーには自らの正統性を主張する術がない。

「ではどうしろと？」

「私めはこの十年間、坊ちやまに隠れてあるお方を捜しておりまして。」

「あるお方？」

確かにトウイーニーは日々の合間を縫って家を空けることがあった。

「サンジェルマン公爵です。」

魔族の爵位で言えば 六王 は一番上の大公に位置する。

その一つ下に位置するのが公爵で、 六王 に次ぐ権力者である事を意味していた。

「聞かない名だ。」

ルシファーは十年もの間、身の安全を守るため身分を隠して生活

してきた。

さらに魔王城にいた時は若干八歳であり宮廷の爵位持ちの名前など知る由もなかった。

「サンジェルマン公爵はサタン様のご学友です。吸血鬼族の長にして嘗てはサタン様とも肩を並べた名手。必ずやルシファー様の力になってくれるはずですよ。」

吸血鬼族 は魔族でも魔人族に並ぶとも劣らない魔力の持ち主として名高い一族であった。

その一族の長たるものの協力をもってすれば、六王にルシファーの正統性を示す事も不可能ではない。

「なるほど……それほどの者ならば。して……居場所は？」

「モンスローン山道 を ウインビーンの森 へ抜けます。森を北に三里ほど行ったところにひっそりと佇む屋敷があります。今はそこにいらつしやるという情報を入手しました。」

「今は……というと？」

「サンジェルマン公爵は非常に気まぐれというか……変わった方で、数年に一度お住まいを変えられるんです。それで居場所を掴むのに随分かかってしまいました。」

（それならば今もじつとしている保証はない……ということになるか。）

「ただ……その……。」

「なんだ？」

「とーっても、とーっても変わった方ですので……お気をつけてください。」

心なしかトウイーニーの顔色が青褪めているように見える。

「その……サンジェルマン公爵と……何かあったのか？」

「なんでもありません！」

あからさまにその間に何かがあった事を示す反応であったが、ルシファーは敢えて深く聞く事を遠慮した。

青褪めた表情を浮かべ、細い腕には鳥肌が立っている……これは

深く聞くべき話ではないと判断した。

「そうか……。兎も角 モンスローン山道 を抜けると言う事は、最初に向かうのは当初の予定通り ゴルジディアンの森 か。そうと決まれば、急いだほうがいいな。」

「そうですね。あの方がいつまでも留まってくださるとは思えませんし。」

トウイーニーもだんだんと落ち着きを取り戻し、普段の冷静な顔になってきた。

「さあ、坊ちやま！残りを食べてしましましょう。」

すっかり会話に夢中になり朝食に手をつける事を止めていた二人は、再び皿に手を伸ばすと最後の朝食を味わった。

その様子はまるで歳の離れた兄弟のようであり、仲の良い親子のようでもあった。

カーテンから朝陽が射し込む。

その光が照らすのがルシファアの明るい未来か、はたまた終焉への導きかは誰にも知りえない。

それでも彼はその命を賭して進むしかなかった。

それがこの十年間変わることのない、彼の決意の行く方向なのだから。

003 (前書き)

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。
指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

朝食を済ませたルシファアは自室に戻り旅の支度を整えていた。重厚な全身鎧に身を包むという選択肢は一族の教えに背く、とトウイーニーから修行の間、再三に渡り注意された。

そうなると多少味方に負担を強いてでも出来る限り装備は軽いに越したことはない。

朝食前に既に着替えを済ませていたルシファアは、壁にかけてあったローブマントを身に纏うと、数日分の食料と地図、ローブなどを詰めたザツクの紐を締めた。

そして愛用の大剣とザツクを背負い旅の支度が終わる。

窓からはまだ昇りきる前の朝陽が射し込む。

(いよいよ、この部屋とも暫しの別れか……。)

十年もの間住んできた部屋ともなると名残惜しいものがあつた。思い返すように部屋を眺めてみれば、そこかしこに懐かしき思い出の品が溢れていた。

(おっと……大事な物を忘れていた。)

木製のチェストの上に置かれた写真立てには、幼き日のルシファアと今は亡き大魔王サタンの写真が入っていた。

裏側の止め具を外し、取り出した写真をローブの内ポケットへとしまう。

今度こそ旅の支度を終えたルシファアは再び1階へと降りる。

「いよいよですね……坊ちやま。」

またトウイーニーが寂しそうな表情を浮かべる。

「そんな顔をするな。俺一人ならまだしもカンヘルもニヤルもいる。」

この十年間でルシファアが得たものはなにも強さだけではなかった。

ルシファアには魔力や魔法では遥かに及ばないものの、それぞれ

に一族の特徴を活かした特技を持った優秀な友が彼の最大の味方であった。

「そうですね……カンヘルもニヤルも私めの立派な弟子です。きつと坊ちやまの力となりましょう。」

「ああ……そろそろ行くよ。村のはずれで待ち合わせている。」

約束の場所はこの アニユチララブマ山 の麓に位置する名も無い村のはずれ、かつての 聖樹 の切り株。

朝陽が昇りきる前には各人、準備を整えて集合すること誓いを立てていた。

「左様ですか……。私めが言う事はただ一つにございます。いつてらっしゃいませ。」

そう笑顔で云うトウイーニーの瞳は若干の潤みを見せていた。

「ああ！必ず帰ってくる……行ってまいる！」

ルシファーは勢いよく玄関扉を開けると外へと飛び出した。

開け放たれた扉はゆっくりと閉じる。

残されたトウイーニーは蹲り、誰にも見せた事のない大粒の涙を流し嗚咽を漏らした。

そして大声で祈った。

「願わくば！どうか坊ちやま……ルシファー様が無事でありますように！」

トウイーニーがルシファーを「坊ちやま」と呼ぶのには理由があった。

彼女にとってルシファーはあくまでお目付け役を預かった子供であり、それは今日まで彼女の不変の務めだった。

しかし今は違う。

魔族の教えに「汝十七にして大人に非ず、汝十八にして子に非ず。汝旅を為して大人たれ。」というものがある。

ここで云う旅とは一つ大きな事を成し遂げて初めて大人になる、という事であるが今のルシファーにとってまさにこの旅こそがそれである。

トウイーニーにとって、それに赴くルシファーはもはや子供ではなく、一人の立派な大人だということだ。

扉を出れば、そこはもう旅の始まり。

ルシファーは今まさに、一つ大きな事に挑もうとしていた。

それも彼以外誰も成し遂げられないであろう大きな事に。

そんな彼を送り出すトウイーニーは祈らずにいらなかったのだ。
った。

そしていよいよ彼の本当の戦いが始まる。

ルシファーは駆け足で村のはずれへと向かった。

「ルシファー様ー！遅いですよー！」

村のはずれの 聖樹 の切り株前には既にカンヘルとニヤルの姿があった。

ルシファーはやや歩を速め、二人の下へ駆け寄った。

「すまないな。どれくらい待たせた？」

「私はそれほどでも。ニヤルは私より半刻ほど早く来たそうです。」

朝方から思っていたよりもトウイーニーとの別れを惜しんで家を出るのが遅くなってしまった、と感じていたルシファーはそれほど待たせていない事が分かり安堵する。

「えっへん！ニヤルが一番なのじゃー！」

「遠足前の子供のようですね……目の下に隈が出来てますよ。」

「にやにやにやー！」

またいつものカンヘルとニヤルのやり取りが始まった。

と云ってもルシファーでさえ気づかなかったほどのニヤルの目元の隈にカンヘルは気づいていたのだから、まさに喧嘩するほどならである。

ルシファーは二人のやり取りを意に介さず話を切り出した。

「旅の前に一つ変更点がある。」

「と云いますと?」

「なんにゃ?」

「当初の計画通り、俺達は ゴルジディアンの森 の前線支援基地を攻める。これは前に話した通り実戦になれる目的もある。」

「その後は ゴルジディアン山脈 の地下城ですな?」

「いや、 ゴルジディアン山脈 の地下城には行かない。」

「では……どちらへ?」

「 ゴルジディアンの森 をそのまま北へ抜ける。」

「北と云いますと…… モンスローン山道 でしょうか?」

これはトウイーニーがルシファーに話した通りであった。

「しかし……あまりに危険過ぎないでしょうか?」

カンヘルの云う意味をルシファーは理解していた。

モンスローン山道 は嘗てより アーシラト高原 …… 即ち魔

王城へ至る山道として整備されてきた要所であった。

南を ゴルジディアンの森、北を ウインビーンの森 に挟まれた狭い山道ではあるが、最も効率良く アーシラト高原 へ至る道として古くから多くの者が利用してきた。

そしてそれは人間にとっても同様のことが言えた。

魔王城を指令基地に据えた人間勢力は ゴルジディアンの森 を西に抜けた ゴルジディアン山脈 でゴブリン王の軍勢と、ウインビーンの森 を西に抜けた サマサンナ湖 でケンタウロス王の軍勢と相対していた。

その戦闘の最中において モンスローン山道 は最も安全、かつ効率よく物資や兵の運搬が可能な行路になる。

それは今なお多くの兵や運搬車が行き来しているという事だ。

「確かに危険は大きい。だが今回の目的地はその先の ウインビーンの森 にある。当初の予定通り ゴルジディアン山脈 へ向かい、そこから迂回していくとしても、 ゴルジディアン山脈 の前線を背後からぬける事と モンスローン山道 を抜ける事の危険度はそう変わらないだろう。」

詭弁であつた。

実際に激戦が繰り広げられている戦地の兵とそこに赴く兵とでは疲労や負傷といった戦闘を左右する要素にあまりに差がある。

「気構えという不確定要素を考慮しても、その差は歴然である。」

「結局、行くしかないってことにや？」

ニヤルは難しい話になると途端に口を出さなくなるが、こういつた不穏な空気には敏感だつた。

この場合、それが前衛的な方向で働いてくれるのが救いであつたが。

「そうだ。それに モンスローン山道 で人間に遭遇するかどうかはまだ分からない。」

カンヘルは難しい表情をしていたが、一度だけ頷いた。

「それからあまり時間が無いんだ。目的の人物がそこにそう長く留まってくれているか分からない。」

「誰に会いに行くにや？」

「サンジェルマン公爵という者だ。」

「分からないにや。」

「聞いたことがあります。確か……相当な変人だとか……。」

カンヘルもサンジェルマン公爵という人物についてトウイーニと同じような評価をした。

ただし今回は風の噂程度の曖昧な認識であつたが。

「そうらしい。聞くところによると父上の学友だつたらしく、六

王 に力を借りるの手助けをしてくれるかもしれない。」

「なるほど……。公爵程の身分、サタン様のご学友とあれば、それなりの影響力もありましょう。」

「ああ。そうと決まれば、早々に出発したいんだが？」

「準備万端にや！」

「首尾は整っています。」

三人の表情は一様に明るかつた。

これから降りかかる困難や立ちほだかる壁の存在など微塵も感じ

させないほどに。

「それじゃあ行くぞ。」

「にゃー!」

「御意!」

三人は歩を進める。

希望とは程遠い旅路を行くために。

まず目指すは ゴルジディアンの森、人間の前線支援基地である。

今日はサタンが勇者の前に屈してからちょうど十年。

あの日から始まった復讐の物語は、今ようやく開演を迎える。

村を出立してから一刻ほど経過した。

ゴルジディアンの森 を行くルシファーら三人は談笑をするほど余裕があった。

「そういえば、カンヘルとニヤルはトウイーニーに別れの挨拶はしたのか?」

カンヘルとニヤルもルシファーと共に魔法の教えをトウイーニーから受けた。

才にあふれた三人であったが、それを一軍の将を務める事が出来る程の実力まで仕立て上げたのはトウイーニーによるものが大きい。

「ニヤルは昨日のうちに済ませてきたにゃ。」

確かにニヤルは前日にルシファーの小屋を訪れていた。

「私は、最後の修行のときに。」

カンヘルは三日前の修行の時間が最後の挨拶だったらしい。

「せっかくなら会っていけばよかったものを。」

ルシファーだけでなく、カンヘルとニヤルもトウイーニーには親子同然に世話になっていた。

「いや……その……なあ、ニヤル?」

カンヘルが口を濁しニヤルへ振る。

「にゃ！？そそそ……そうにゃ！」

振られたニヤルは動揺している。

「なんだ？」

ルシファアはやや眼光を強め、回答を迫る。

「はあ……。こうなつては敵いませんな。」

「どうやらルシファアだけが状況を理解しておらず、ニヤルとカンヘルはお互い通じていたようだ。」

「ニヤル達も朝方、ルシファア様のうちにいったのにゃ。でも……その……あまりに仲よさそうで……。」

「躊躇してしまいましたね。それで自宅に戻って時間を潰していたのですよ。」

ルシファアは普段の冷静さを失い赤面する。

だが同時に少し寂しさを覚える。

それはこれから旅をしていく中であつてはいけない躊躇であつた。遠慮や同情、迷いや躊躇は時として仲間の身を殺める。

これはトウイーニーが最後の修行で教えてくれた事であつた。

「少し止まれ。」

ルシファアの促しに先を行く二人が歩を止める。

「よく聞いて欲しい。俺たちはこれから朝起きてから、寝るときまでずっと一緒にいる仲間なんだ。だから遠慮なんかするな。当然俺もお前達を家族だと思つて接する。」

これはルシファアの本心でもあり、願望でもあつた。

唯一の家族を無くしたルシファアにとって、カンヘルやニヤルといった友やトウイーニーは、家族にも等しい存在であつた。

あつて欲しかった。

「ルシファア様……。」

ニヤルが似合わない哀しげな表情を浮かべる。

「我が主の気を損ねるとは……私もまだ未熟ですな。」
カンヘルも難しい表情を浮かべる。

「よし！二人とも武器を取れ！」

と云いルシファアが背に負った魔剣を掲げる。

ルシファアは敢えて明るい表情を浮かべていた。

それに釣られてカンヘルとニヤルの表情も明るくなる。

ニヤルは腰に携えた短刀を、カンヘルは自らの右腕をそれぞれ掲げる。

「俺はこの魔剣に！」

「ニヤルはこの刃に！」

「私は我が腕に！」

「今日、この日より我等は血縁にも等しき盟約を結ぶ！たとえ離れ離れになろうとも我等はこの盟約に従い、共に歩むことを誓う！我が名はルシファア！」

ルシファアは促すように二人に目を向けた。

カンヘルとニヤルはそれに頷き、応える。

「我が名はニヤル！」

「我が名はカンヘル！」

三人は一様に清々しい表情を浮かべる。

傍目に見ればなんでもないような誓いであるが、この儀式的な行為は三人に盟約という名の確かな繋がりを産んだ。

今までは友や仲間といった不明確であった繋がりを明確に意識する事で、お互いの内にある躊躇や遠慮を無くす事がルシファアの狙いであった。

ルシファアの思惑通り事は運んだ。

「よし！それじゃあ先を急ぐぞ！人間の基地は近い！」

一行は再び前へと歩を進めた。

一歩ずつ踏みしめるように歩む大地は固く、生い茂る緑は深い。

それでもその全てが彼らの行く道を遮る事は無い。

まるでそれが大地の、緑の選択であるかのように。

人間の前線支援基地はもう目と鼻の先まで迫り、彼らの初陣は幕を開けようとしていた。

彼らの旅はもう始まっているのだ。

004 (前書き)

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。
指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

「ルシファー様ー？ルシファー様ッ！」

ゴルジディアンの森の前線基地での初陣を勝利で飾ることに成功したルシファー達は、旅の最初の晩をその前線基地で過ごしていた。

もつとも基地といつても簡素な小屋が幾つか並んでいる程度の補給基地ではあるが。

しかし彼らが一晚を過ごすには充分すぎる物資と食料が揃っており、彼らは旅の最中にも関わらずシチューを頬張っていた。

「……ん！？ああ、すまない。どうかしたか？」

ニヤルの呼びかけによく気づいたルシファーが応答する。

「一点を見つめたまま動かないからびっくりしましたよ。何か考え事ですか？」

カンヘルもニヤル同様に呼びかけていたらしい。

「いや……なんでもない。」

ルシファーは余計な心配はかけまいと、あの夜の事、サタンが勇者によつて葬られた夜の事を思い出していたとは言わない。

ニヤルとカンヘルの二人はこの基地に来る前に固い契りを交わした仲ではあるが、専らこの旅の目的はルシファーの私情に寄るところが大きい。

勇者への復讐は完全にルシファーの個人的な目的であり、魔族の再興は二人にも関係のある事柄だが、根本的には魔王子であるルシファーの目的である。

だからなおの事、ルシファーは二人に余計な心配はかけたくなかったのである。

「水臭いにゃー！ルシファー様、隠し事はよくないにゃー！」

「そうですぞ。我らはもう家族なのですから。」

ところがニヤル達に云わせれば、それはルシファーの取り越し苦

勞であつたようだ。

怒つたような顔を向けるニヤルと穏やかな笑顔を向けるカンヘル
(また……余計な事を考えてしまったな。)

ルシファーは苦笑いを浮かべながら二人の顔を見つめ直す。

「そうだな、すまない。……あの夜の事を思い出していた。」

あの夜の事はニヤルもカンヘルもルシファーとトウイーニーから
聞いていた。

それが二人がこの旅に同行を決意した一因でもある。

「そうですね……。」

特にルシファーと付き合いの長いカンヘルは思うところがあつた。
それは天性の魔力と努力で掴み取つた魔法の才を持つ一見完璧な
ルシファーが、時折見せる危うさのようなものであつた。

時たまルシファーは、今のようにあの夜の事を思い出し思考を停
止する。

それはある種の強烈なフラッシュバックのようなものであるとカ
ンヘルは推測する。

「だが心配するな。それよりも明日の事を話しておこう。」

カンヘルの心配をよそにルシファーは話を明日以降の予定に変更
した。

当初の予定であれば、このまま森を西に抜け ゴルジディアン山
脈 を目指す事になっているが、ルシファーが村を出る前に話した
とおり森を北にを抜け モンスローン山道 を目指す事に変更さ
れている。

ただこれにはいくつかの弊害を伴う。

一つは森を西に抜ける場合、 ゴルジディアン山脈 の戦地を背
後から突くためこれ以上前線支援基地にぶつかる事は無かつた。

しかし北に抜けるとなると話は変わってくる。

「二人とも朝の時点では気付いてなかつたかも知れないが、俺達は
ここより北の調査をしていない。つまりここ以外にも支援基地、或
いはもつと重要な基地、要塞すらあるかもしれない。」

もう一つは追っ手の存在である。

当初の予定通り前線支援基地で戦闘を行った後、ゴルジディア山脈の地下城へ到達するのに相対する敵は戦地の人間軍だけのはずであった。

「それから……北に進むとなると当初より多くの日程を要する上、基地の壊滅を知った人間軍から追っ手がかかる可能性がある。」
そうなるとう当初考えていたより旅は困難の度合いを増す。

特に追っ手がかかるとなれば、基地を壊滅させた魔族を討てる、或いは相応の実力を持った者と戦闘になるパターンがある。

さらにはより多くの兵員を動員され、包囲戦に持ち込まれればいくら実力のある三人とはいえ困窮せざるをえない。

「それは避けたい事態ですね……。」
カンヘルも旅の困難さが増した事に気付き、顔をゆがめる。

「うーん……ニヤルは難しい事はよくわからないのじゃ。」
ニヤルも言葉ではこう云っているが、直感的に余り事が上手くないていない事を察していた。

「兎に角、あまり悠長にしている時間は無いということだ。明日は陽が昇る前に立つ。」

「それが賢明でしょう。」
「わかつたにゃー。」

三人はそれぞれに明日への決意を固め、残ったシチューを急ぎ口へと運んだ。

「食べ終わったら就寝にしよう。明日は朝陽が昇る前にはここを出立したい。」

ルシファアの言葉の意は先ほど話したとおりであった。
「そうですね。月の位置からして……今からだと恐らく六刻ほど寝られるでしょうか？」

「いや、一人は周囲の警戒にあたった方がいい。二刻ごとに交代しよう。」

「じゃあ最初はニヤルにゃー！」

猫耳族 は夜中でも良く利く感覚を持っている上、感覚器官や身体能力を向上する魔法を得意としていた。

夜中の警戒活動に最も適していることは云うまでも無い。

「それでは次は私が。」

対してカンヘルはニヤル程警戒活動に向いているとは云い難い。

大きな身体は月明かりがあれば簡単に視認されてしまう。

ニヤルほど優れた感覚があるわけでもなければ、それを強化する魔法はどちらかと云えば不得手としている。

しかしカンヘルの場合、急襲に会い寝起きで準備の整わない味方を守ることに秀でてている。

「じゃあ最後は俺が。」

そうなるトルシファーはこと警戒活動には向かない。

優れた感覚器官や身体能力を有しているわけでもなく、見方を守る術に長けている訳でもない。

頼れる物は冷静な頭脳と圧倒的な魔法を操る術。

それほど得意とはしていなくとも感覚強化や身体能力の向上の魔法も習得している。

夜明けが近くなれば敵の視認性も向上する。

「それじゃあ最初はニヤル、次が私、最後は主で決まりですな。」

彼らが無気なく決めたように思える警戒の順番にはこうしたお互いの得手不得手を知っている上での判断があった。

それは二人が長い修行の中で学んだお互いに対する信頼に縁るところが大きい。

「そうと決まればカンヘルとルシファー様、後はニヤルに任せてもう寝るのじゃ！」

寢床の準備はカンヘルが既に整えている。

寢床といっても基地から拝借してきた数枚の毛布しか無いが、幸い季節は初夏であり、この程度の寢床でも充分に休息がとれる。

「それじゃあニヤル、後は任せたぞ。」

「はいにゃ。」

カンヘルとルシファーはそれぞれに毛布へと包まり床に就く。

ニヤルはそれを確認すると、火を取り囲み寝ている二人を見下ろせる大木の枝に飛び乗った。

(ここにやら周囲も見渡せそうにや。)

ニヤルは腰に携えた短刀に左手をかけると、周囲を見渡した。

辺りは木々が生い茂っているが、基地の建屋が並ぶこの辺りだけ開けていた。

ニヤルはふと空を見上げる。

(今夜は月が綺麗にや。)

星が輝く夜空には月が一際強く輝いている。

それは旅が始まって初めて三人で過ごす最初の夜を祝福しているかのようにだった。

ニヤルは視線を眼下で寝ている二人に向けると、二人を起こさないように詠唱を破棄した感覚系の中級魔法 **メトトミューブ** を発動した。

メトトミューブ は視覚と聴覚を強化する魔法で、元々感覚の優れたニヤルが使用すれば、日中活動すると変わらない視覚と広い範囲の音を聴くことが出来る聴覚を手に入れることが可能であった。

その索敵可能範囲は半径半里を超え、まさに簡易のレーダーのような存在であった。

(今の所、怪しい音も聞こえないにや。)

ニヤルは安堵しつつ、一旦魔法を解除した。

彼女はルシファー程膨大な魔力を有してはいない。

いくら中級魔法とは云え、下で寝ている二人に気を使い詠唱を破棄して魔法を常時発動していたら魔力が持たなくなってしまう。

この場合、一定の間隔で魔法を発動し警戒に当たるのが最も正しい選択肢であった。

まだまだ夜は長い。

一度大軍に囲まれたり、奇襲を受ければ苦戦は必須である。

ならばそういつた危機は未然に防ぐのが最良である。
ニヤルは決意を新たに、周囲の警戒を続けた。

「……ヘル……カンヘル、起きるにゃ！……おい、でくの坊！」
すっかり寝入っていたカンヘルの耳に耳障りな声が聴こえてきた。
「……誰がでくの坊だ！」
彼が村にいたころの一日は実に清清しく、満ち足りていものであった。

朝は鳥のさえずりとカーテンから漏れる陽の光で目を覚まし、簡単な朝食を取り、修行に出かける。

昼は師匠であるトウイーニー手製の昼食で休息を取る。

夕方には厳しい修行を終え、またトウイーニーの豪華な夕食が待っている。

しかし今は違う。

いつ何時襲いくるか分からない人間に備え、ゆっくりとした休息などとってられないのだ。

(しかし……しかしだ。こんなに邪な悪意に満ちた起こされ方では、とれる疲れもとれない。ここは一言ガツンと……。)

「シーっ！ルシファー様が寝てるんだから、もう少し静かにするにゃ！」

(それは……貴様が……。)

沸々と沸いてくる怒りを抑え、カンヘルはルシファーの方を見た。
幸いまだ目を覚ますには至ってはおらず、安堵した。

「もう交代の時間か。」

「そうにゃ。あとは頼んだのにゃ。ふあゝ。」

そう云ってニヤルはカンヘルの毛布を剥ぎ取った。

「なっ……お前の毛布ならそっちに用意してるだろ。」

カンヘルが指差した方には確かに一枚の毛布が用意してあった。

「ニヤルは寒がりなのじゃ。いいからさっさとあっち行くじゃ！」
キリツとした睨みを利かせるニヤルであるが、云ってる事は無茶
苦茶である。

カンヘルが用意した毛布は焚き火でしっかりと温まっているはず
である。

(それが分からないはずでもなかるうに。)

「うーん、あったかいじゃ。」

そうこう考えている内にニヤルはさっさと装備を脇に置いて毛布
に包まってしまった。

(やれやれ、こいつの考えることはよくわからん。)

「おい。何か異常はなかったのか？」

「……もうお腹……いっばいじゃ」

(なんて早さだ！！)

ニヤルは毛布に包まってものの数十秒で寝てしまった。

カンヘル達は今までの修行の中で何度か夜中訓練を行っていたが、
ニヤルの寝入りがここまで早い事には気づいていなかった。

カンヘルはニヤルがそれほどの緊張と疲れの中で警戒に当たって
いたと推測し、余計に緊張感が高まる。

彼の場合、全身鎧が常時装備である為、身に付けるのにそれなり
に時間がかかってしまうのが難点であった。

この機を狙われた場合、困難は必須である。

それを避けるためにもニヤルには異常の有無を確認したいという
意図があった。

(まあ特に異常は無かったという事だろう。)

カンヘルはそう判断して装備を身に付けた。

それから周囲を見渡して先ほどまでニヤルが登っていた大木の根
元に腰掛けた。

カンヘルの場合、感覚強化の魔法は得意としていない。

身体能力向上の魔法は心得があるが、ここで用いることは得策と
は云えない。

ここでの彼の役割は奇襲の際、寝ている二人が睡眠状態から戦闘状態へ移行するまでの間、二人を守りきる事にある。

であれば、ここは魔力を温存し、敵の奇襲に備えるというのが最善である。

カンヘルは自ずとそうした役割を理解し、そしてそれを実行していた。

(何分……二刻という時間は長いな……。)

カンヘルはそう心の中で呟いて、落ちていた小枝を焚き火の中へと投げ入れた。

彼の云う通り、夜はまだまだ長かった。

二十二刻辺りに床に着いた事を考えると、ちょうど日付が変わっている頃であった。

早朝四刻半には身支度を整え、此処を立つとしてもまだ半分も過ぎていない。

警戒を緩めるにはまだ至らなかった。

もし前線支援基地と他の基地や前線との間で夜間の定時連絡などがあるとすれば、敵が基地の異常を疑っても不思議ではない。

そうなる则ち他の基地から様子見の偵察がいつ来てもおかしくない。そしてそれは時間が経てば経つほど襲来のリスクが高まってくる。

カンヘルはそれに加え一つの心配事があった。

(ルシファー様はまだあの時の事を思い出されているのか……。)

それは先程、ポーッと一点を見つめたまま動かなかったルシファアの事であった。

カンヘルは長い付き合いの中で、ルシファアのこうした挙動を何度か見かけている。

まるで完全に停止してしまつたかのようにさえ思えるその挙動を見るたびに、カンヘルは云い様のない不安に襲われる。

もし戦闘中、或いは命の危機に瀕したときにその挙動が訪れてしまつたら……いくらカンヘルとは云えど守りきれぬ自信はなかつた。(しかし、今考えても仕方あるまいか。)

事は起きてからでは遅いとは云うが、この場合ルシファーが自らなんとかせねばならない事であった。

実際カンヘルがそれを伝えたところでどうにかなる程、浅い問題ではない。

今カンヘルに出来る事は、もしそうなった時にルシファーを守り抜く事にある。

そして今の彼の役割もそれと同じ事であった。

カンヘルは再び、決意を新たに警戒心を強めた。

彼らの最初の夜はまだまだ長かった。

005 (前書き)

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。
指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

事に最初に気づいたのは警戒に当たっていたルシファーではなく、まだ寝ているはずのニヤルであった。

つい一刻前にカンヘルから警戒の任を変わっていたルシファーは、感覚系初級魔法 ラピブマ を詠唱を破棄し用いていた。

その効果は視覚強化で、これによりルシファーは日中とほぼ変わらない視力を有していた。

若干の心許無さはあるが、前任者である二人がなんら異常を感知していない事から判断しての事であった。

しかしその判断は甘かったと云わざるをえない。

突如寝ていたはずのニヤルが毛布を跳ね除け、飛び跳ねるように起き上がった。

「どうした!? ニヤル?」

ルシファーの目には未だ異常は発見できない。

「聞こえるにや……。」

それは 猫耳族 であるニヤルのみが為せる業であった。

魔族の中でも高位に位置する 猫耳族 の聴覚能力は、確かにその存在を認識していた。

「近いのか?」

焦りにも似た感覚がルシファーに襲い来る。

ニヤルの拳動が、敵の襲来を指し示していた事は明確であった。

「……距離…… 四半理、敵…… 騎兵、十…… いや…… 二十はいるのにゃ!!!」

それはルシファーの想定を遥かに超える数であった。

(騎兵であれば二分と経たないうちに到達できる距離に敵が二十以上!?)

ここまで接近を許した落ち度はルシファーにある。

ルシファーは メトトミューブ あるいは、それに準ずる感覚強

化の魔法が使えない訳ではない。

しかし一かけらの油断と甘い判断が間近に迫る危機を招いてしまった。

二人の会話にカンヘルが目を覚ます。

「……どうかされましたか？」

こうなってしまうえば、ルシファーは苦渋の決断を下すしかない。

本来であれば、出来るだけ足跡は残さずこの前線支援基地を出立する予定であった。

しかし間近に迫る敵を前にそこまでしている余裕はない。

「話をしている暇は無い！カンヘル！ニヤル！各自、装備を整えて二十秒で出立だ！」

兎に角この場から離れる必要があった。

人間が基地に近づけば近づく程、危険の度合いは増す。

ましてや異変を察知した上での危機感を持った接近だとすれば、その危険度は戦闘状態のそれと同義であると云える。

「は、はい！」

カンヘルは即座に立ち上がり、全身鎧に身に付け始める。

ニヤルの場合は飛び起きた際に持っていた短剣を腰に携え、鞆を背負うだけであった。

ルシファーも同様に大剣とザックを背負うだけであった。

しかし全身鎧のカンヘルはそうはいかない。

肘当てと膝宛は装着したまま寝ていたが、両脚、両腕、腰、上半身に及ぶ全六つの装備を纏わなくてはならない。

刻々と迫る時間のなかでカンヘルはルシファーとニヤルの手を借りて、両脚、両腕、腰までは身に付け終えた。

「後は走りながら！」

そう云ってカンヘルは出立を促す。

「わかった。行くぞ！」

ルシファーを先頭に一行は北に進路をとった。

カンヘルは脇に上半身部の鎧を抱えたまま後を追うように走り出

した。

ニヤルがその後方を警戒するように追従する。

彼らの夜明けは思わぬ形で訪れることになった。

しかも最も警戒していたことであり、最も望んでいない形での事であった。

「ニヤル……敵の様子は分かるか？」

前線支援基地を離れ四半里ほど進んだところで三人は一度立ち止まって息を整えていた。

ニヤルは敵の存在を感知してからずっと感覚系の初級魔法　モヴマ　を詠唱を破棄し発動していた。

モヴマ　は聴覚強化の魔法で、ニヤルをもってすれば半径半里の音を聞き分けられる。

「ギリギリ間に合ったみたいにや……基地の手前で速度が落ちてるにや。」

推測に過ぎないが、それはルシファー達が倒した人間達の亡骸を発見したことによる停滞であった。

ルシファーは今後予想される動きを二通り想定していた。

一つは即座に追っ手がかかる事。

騎兵を用いている事から考えれば、ここで追っ手がかかる事は好ましくない。

もしそうなれば騎兵のスピードから考えて、発見されるまでそう長くはかからない。

勿論その中には魔術の心得がある者や相当な手練が含まれる事も有り得る。

そしてその追っ手と相対し始末できれば良いが、仮に取り逃がしてしまった場合、さらに多くの追っ手とルシファーらに対抗できるクラスの追撃がかかる可能性がある。

結果的にさらに多くの危険を招く事になりかねない。

もう一つは敵が一度拠点に戻り、その上で準備を整えて追っ手がかかる事。

ルシファー達が相当数の兵を倒している事を考えれば、迂闊に追っ手を放つ事は非常に危険である。

そうなれば一度拠点に舞い戻り、準備を整えて改めて搜索に向かうというのが常策でもある。

この場合ルシファー達は急場は凌ぐことが出来る。

しかしより強者の追っ手がかかる事も考えられる。

何れにせよ状況は好ましくなかった。

「敵に動きはありそうか？」

ニヤルは目を閉じ、意識を音に集中する。

「……まずいじゃ！」

「どうしました？」

全身鎧を身に着け終えていたカンヘルが不安そうな表情を向ける。

「……敵が二手に分かれてるじゃ！片一方はもと来た方へ……もう片方はこちらに近づいてるじゃ！」

それはルシファーの想像を超え、さらに最悪の展開であった。

ルシファー達が足を止めている以上、騎兵の追撃を免れる事は叶わない。

敵の将はルシファーが思っていた以上に切れ者だったらしい。

そして今、その刃がこちらに向けられている。

彼らが取れる策は無に等しい。

あるのは単純な力と力の相対、そして敵を殲滅するという一点に尽きる。

「……ここで敵と相対する！正確な数は認識できるか？」

ルシファーは意を固めた。

ニヤルもカンヘルもそれに追従し、気を引き締める。

「……七……九、敵は九騎じゃ！」

それは現状において多いとも、少ないとも云い難い人数であった。

前線支援基地に駐在していた兵員程度の敵であれば何とも無い数であるが、ある程度魔法を使役出来る、或いは武芸に長けた兵の襲来となると苦戦を強いられる可能性がある。

しかもこの場合、基地の兵員が皆殺しという現状を見ても尚、追っ手をかける判断が為されている事から察するに後者の場合が想定された。

ルシファー達にとって最も避けたい事態の到来であった。

(九か……。どうする？どうすればいい？)

ルシファーは極度の焦りと不安を感じていた。

そしてそれはカンヘルとニヤルの二人にも伝染する。

恐らく冷静になれば、九人の人間と相対して死ぬことはおろか大きな傷を蒙る事もないだろう。

しかし冷静さを欠き、焦りと不安の入り混じる中でそれなりに腕のある者を相手にする事は難しい。

彼らが今直面しているのは、盤上の戦術思考ではない。

本物の命のやり取りであった。

「……ルシファー様。」

額に一滴の汗を流したカンヘルが口を開く。

騎馬の速度からすれば敵と相対するのにそう多くの時間はない。

「なんだ？」

「私が敵を引き付けます。その間にルシファー様とニヤルが敵を攻撃して下さい。」

その献策が意味するところは捨て身の囮役であった。

いくら防御能力に秀でたカンヘルとは云え九人から集中砲火の如き攻撃を受ければひとたまりもない。

カンヘルも勿論それを理解したうえで言を述べていた。

「なあに、いつもの事ではありませんか。私が護り、ニヤルが駆ける……そしてどんな事があるうとも最後に立っているのはルシファー様です。」

いつもの事……。

日々の修行で培ってきた、学んできた数々の戦術。

その多くがカンヘルを防御の盾、ニヤルを矛、そしてルシファーがそれを操る戦士と想定し構成されていた。

だからカンヘルは敢えて云う……いつものこと。

これは信頼という名のプレッシャーだ。

仲間の命を預かり、策を練り、戦いを勝利に導く事はルシファーの役割なのだ。

「……分かった。ニヤル……あとどれ位だ？」

耳を済ませたままのニヤルは馬を駆け近づいて来る敵の音をしっかりと聞いていた。

「早くて三十秒にゃ！」

三十秒、ある程度の装備を持った騎兵の跨った騎馬が駆けるとして距離にすれば、大凡五町程……迎え撃つにはあまりに短い時間であった。

それでもルシファーは策を練る。

それが彼の役割であり、為さねばならない事であった。

(……こんな時トウイーニーならどんな策を採る?)

彼が思い出していたのは、修行の中で培ってきた数多くの戦術の心得。

そしてその中から最善の策を導き出す。

(やっぱり……こうするしかないか。)

それは簡潔で今出来る最善の策であった。

実践経験に乏しい彼らには、多くの選択肢の中から複雑な行程を踏む事は好ましくない。

であれば、

「カンヘル……お前はここで敵の攻撃を一手に受ける。ただ耐えてくれ。」

「御意！」

カンヘルは口を真一文字に結び、意識を集中していく。

「ニヤルは木の上で待機。合図とともに最大火力で敵を叩け！」

「でっ、でも九人も一度に攻撃する魔法も攻撃もニヤルにはないにや！」

ニヤルはどちらかと言えば、敵の懐に入り込み確実に仕留めていくタイプの戦い方を得意としている。

流れの中での連撃なら兎も角、同時に九人を叩く事は難しい。

「恐らく敵は九人でカンヘルを包囲してくるだろう。ニヤルはカンヘル左方に来た敵を三人……難しければ二人でも構わない。」

「それにやら……いけるかもにや！」

ニヤルの瞬発力と俊敏性を以つてすれば、敵二人を一瞬で斬り捨てる事など造作もない。

相手が魔法を発動する隙すら与えないどころか、展開次第では続けざまに別の敵に攻撃する事も不可能ではない。

「後は俺に任せてくれ。」

ルシファアは強い決意を胸にただ一言そう云った。

そしてその言葉にカンヘルとニヤルはただ一回頷いた。

カンヘルはその場で集中力を高め、ニヤルとルシファアはその左右にある木の枝に登り身を潜めた。

カンヘルは瞼を閉じ、神経を研ぎ澄ませていく。

彼の優れた防御能力と魔法を用いれば、並の兵相手に大きなダメージを受ける事はほばないと云える。

しかし今から彼が相對しようとしているのは、恐らく相応に腕の立つ兵達であると推測できる。

そうとなればカンヘルの役割はただ耐えるという一点に終始する。

(ルシファア様が任せると云った……ならば私はそれを信じ、全力で役目を果たすのみ！)

カンヘルは強く心に誓い、閉じた瞼を見開いた。

朝靄が立ち込め、静まり返った森に騎馬の駆ける音が木霊す。

戦いの合図を告げるかのごとく鳥の鳴き声がする。

カンヘルは不思議と自身に満ちていた。

その自信が何処から来るものなのか、彼自身よく分かっていた。

それこそがルシファーに対する絶対の信頼であった。幼き頃より共に修行し、共にここまでできたルシファーが任せると云った以上、カンヘルは絶対の信頼を寄せるしかない。

そしてその信頼は強い自信に繋がっていた。しかし状況から云えば、彼らに最初の窮地がやって来たという事になる。

そして恐らく、始めて味わうであろう死の恐怖と戦うことになる。彼らの第二陣が幕を開けた。

間もなくして騎馬に跨った兵達がやって来て、カンヘルを前にして立ち止まった。

ニヤルの云った通り、数は九。いずれも腰に剣を携え、戦闘用の装備に身を包んでいるが、それは敵追尾用の軽装であった。

ルシファー達にかかった追っ手に間違いない。「我こそは ゴルジディアンの森 駐留軍第一分隊副隊長アランディアである！その魔族に問おう！基地の者を殺したのは貴様か？」先頭で兵達を率いてきた男が腰の剣を引き抜くと高らかに宣言した。

茶髪の長髪を後ろで束ねた髭面の男がどうやら彼らの指揮役であるらしい。

対するカンヘルは相手の出方を伺おうと構えを崩さず、アランディアを睨み付けた。

「不答は是、認めた事とみなす！ 聖戦連合軍 の名において貴様に正義の鉄槌を下す！」

聖戦連合軍 は人間側の諸国が 聖戦 に際して結成した超国派の連合軍である。

そして現在、人間に支配されている魔族領域を管理、防衛してい

るのも彼らであった。

その中でも、ゴルジディアンの森の駐留軍の第一分隊副隊長を務める程の実力者が直々に出向いているという事は、カンヘルにとって好ましくなかった。

現時点ではアランディア及び八人の兵の実力は未知数であるが、それ相応の実力を持っていることは明白である。

特に前日に殲滅した前線支援基地の兵員達とは比べ物にならない事は明らかであった。

「敵を囲め！」

アランディアは馬を飛び降りると、他の八人も同様に馬を降りてカンヘルを取り囲んだ。

腰に携えた剣を引き抜くと剣を構えた。

「いくぞ！ハアツ！」

アランディアが先陣を切り、カンヘルに斬りかかる。

「グツ！」

重い一撃が振り下ろされるが、カンヘルはそれを右腕の鎧部で受け止める。

「続け！」

カンヘルの周囲を取り囲んでいた兵達が一斉に斬りかかる。

「うおお！」

「おりゃあ！！！」

「防御結界 アキレウス ツ！！！」

カンヘルはアランディアの刃を弾き飛ばすと、両腕を大きく開き魔法を発動した。

アキレウスは結界系の上級魔法で自身を中心に円形の防御結界を発動する。

その効果は一切の物理攻撃の拒絶。

兵達が振り下ろした一撃は光の壁によって遮られる。

「構わん！続ける！」

アランディアの指揮に兵隊は剣を振り下ろし続けた。

(くっ……敵も馬鹿ではないか……。)

アキレウス は確かに優秀な防御結界であるが、同時に多くの魔力を消費する。

さらに両腕を封じられる上、魔法攻撃に対しては有効ではない。いくらカンヘルが優秀な魔族であったとしても、その魔力には限りがある。

持久戦に持ち込まれれば苦戦は必須であった。

「おらぁ!!!!」

「ぐっ!!」

八人の熟練した兵達の一撃が容赦なく振り下ろされ、カンヘルは徐々に魔力を消耗する。

「我が剣に精霊の庇護を！ 光の聖剣 ツ!!!!」

やや距離をとっていたアランディアが唱えた魔法、 光の聖剣

は刃の精霊の力を任意の対象に付与する庇護系の中級魔法であった。

アランディアの構える剣が輝かしい光を帯びていく。

「さあ、魔族の者……貴様とて我が光の刃は受けられぬ！これで……

……終わりだ!!!!」

アランディアは光り輝く刃を振りかぶるとカンヘル目掛け振り下ろす！

(ぐっ!)

太陽の光が刀身に反射し、辺りを眩しいばかりの光が包む。

カンヘルも思わずその光に目を閉じた。

それはカンヘルが初めて経験した命の危機であった。

だが同時に生きている喜びを強く感じた瞬間であった。

何故なら、目を開いた時に眼前に立っていたのはアランディアでも敵兵でもなく……カンヘルが信じていた男、ルシファーであったからである。

006 (前書き)

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。
指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

(今だ！)

光り輝く剣と朝陽が交わり放たれた光が輝く中、ルシファアはニヤルに合図を送った。

同時に煙幕弾をアランディアの足下へと投げる。

辺りには朝靄とは別の深い灰色の煙が立ち込める。

ルシファアの合図に素早く反応したニヤルは眼下で剣を振るい続ける兵達の背後に飛び降りた。

「うっ……。」

「ぐっ……。」

そして両の手に携えた短刀の刃が的確に二人の兵の首を割く。

鮮血の飛沫が地面に落ちる前にニヤルから見て右方、カンヘルの左後方に位置どった敵の懐に飛び込む。

「にゃあああああああ！！！」

ニヤルに反応した敵の一撃を交わし、鎧から露出した腹部に短刀の刃が突き立てられる。

「うっ……くっ……そっ……。」

敵兵は力なく地面に崩れ落ちた。

ニヤルは命じられた役目をなんら怠りなくこなす。

ニヤルが三人の敵を倒したのと時を同じくして、ルシファアも自らの役目を果たすべく動いていた。

煙幕弾を投げ終えたルシファアはニヤルが飛び降りるのを確認すると自身も枝の上から飛び降りた。

「テヒムヒーッ！」

降下に乗じてルシファアが発動した魔法は任意の単体の動きを一時的に完全に停止させる氷結系上級魔法であった。

発動した相手は今まさにカンヘルへとその刃を振り下ろしていたアランディアであった。

足元から遅い繰る強烈な冷気によって、まるで最初からそこに立っていた立像の如くアランディアの動きが完全に停止する。

「くっ……」

動きを止められたアランディアは力でその拘束を解こうとするが微動だに出来ず、僅かに動く顔面の表情が次第にきつくなっていく。ルシファーは攻撃の手を緩めない。

「ツンラララペンチャンタン　ッ！」

右後方を振り向きざまに発動した魔法は任意の方向に氷の刃を等間隔で振り落としていく凍結系上級魔法であった。

カンヘル右方に陣取っていた兵達の頭上に突如として氷の刃が振り落とされる。

「ぐはっ！」

鋭く尖った刃は、追尾用の薄い兜をいとも簡単に突き破り脳天に突き刺さる。

熟練した兵達にとって普段であれば避けきれない、あるいは防ぎきれない攻撃ではなかったが、突然の煙幕と姿の見えない敵の襲来に対応しきれず屈していく。

（馬鹿な！？重複魔法だど！？）

アランディアは心の中で驚愕していた。

魔法の絶対原則である魔法の単独発動制限。

個による魔法の重複発動は前に発動した方の魔法が打ち消される形で、後に発動した方の魔法が優先して発動される。

今アランディアの身体は確かにルシファーの放った　テヒムヒー　によって停止されていた。

にもかかわらずルシファーは重複して　ツンラララペンチャンタン　を発動してみせた。

アランディアは一体目の前で何が起きたのか理解できず、ただ目を見開いてその光景を眺める事しか出来ない。

奇しくも自身の剣が放った光で煙幕の中でも倒れていく部下の兵達の姿がはつきりと見えてしまった。

氷の刃が降り注ぎ、カンヘルの右方と後方に陣取っていた四人の兵が無残にも崩れ落ちた。

「カンヘル！左前方！」

ルシファアの呼びかけが終わる前にはカンヘルは既に動いていた。アキレウス の展開を解き自身の右前方に構えた兵に右腕を突き出す。

「うおおおおおっ！！！」

構えていた兵は辺りを包む煙幕とニヤルとルシファアの奇襲に動転し、咄嗟の一撃に反応出来ない。

「ぐはっ！！！」

カンヘルの強烈な一撃が直撃し、衝撃で敵兵は大きく吹き飛ばされた。

それは戦闘の終結を告げる合図でもあった。

もはやアランディアに打つ手は残されておらず、もし策があつたとしてもそれを実行する兵どころか自らの身体すら動かせない始末である。

（これまでか……。しかし……。これは一体！？）

アランディアの脳裏に渦巻いていたのは絶望的な状況よりも、今しがたルシファアが目の前で見せた所業についてであった。

しかし今の彼にはそれを問いただす事もままならない。

苦々しい表情を浮かべるアランディアの前にルシファアが佇む。

「済まないな……。最期の言葉を聞く気はない。」

ルシファアは冷たくそう告げると背中中の魔剣を引き抜いた。

アランディアは死への恐怖は勿論の事、得体の知れぬ出来事に遭遇し、為す術無く散っていくことが納得出来なかった。

しかしかにな無理な出来事を目の前にしても、死は等しく訪れる。

（ぐっ……。！！）

ルシファアは静かに、且つ的確にアランディアの心臓目がけてその刃を突き立てる。

飛び散る血飛沫と共に、アランディアの意識はそこで途絶えた。ルシファー達の完全なる勝利にて戦闘は終結した。

だが依然として状況は悪く、一刻も早くその場を立ち去る必要があった。

「カンヘル、ニヤル！二人とも無事か？」

「ええ……私はなんとか。」

「ニヤルは平気なのじゃ。」

カンヘルは魔力の消耗が激しかったものの、ほぼ無傷でこの戦闘を乗り切っていた。

防御能力に秀でた 岩人族 の能力は伊達ではなかったようだ。

ニヤルに至ってはその場で飛び跳ねる余裕すら見せる程であった。ルシファー自身も相応に魔力を消費していたが、一見無尽蔵にさえ思える彼の魔力を持つてすればまだ余裕があるといった感じであった。

「それなら早々に此処を立ち去るぞ。兎に角、北に進路をとろう。」
一先ずの追っ手を殲滅する事には成功したが、敵はあくまで先遣隊である事が推測できる。

（こちらの想定を上回る速さと、最善とも云える部隊展開……恐らくこの指揮を執っているのは先程の男ではない。）

急ぐに越した事は無い。

事実、部隊が二分され一方が追っ手として出向いて来たという事はもう一方は本陣に帰還し応援を求めているという事になる。

そうとなればさらなる強敵や大多数の追っ手がかかる事も考えられる。

それを回避するには兎に角、敵から離れること以外に無かった。

「そうですね。我々も急ぎましょう。」

一番疲労を抱えているはずのカンヘルが先頭を駆け始める。

つられる様にしてニヤルとルシファーも後に続く。

朝陽を背にして走る三人の姿はどこと無く歪んで見え、否応にもこれからの旅の困難さを想像させた。

それでも彼らは前に進むしかなかった。
ルシファア達は血生臭さと朝露の匂いが入り混じった森を北へと急いだ。

すっかり朝陽は昇り、森を覆う木々の間から木漏れ日が射し込む。予期せずして訪れた彼らの第二陣を終え、一路北へと急いでいた。「しかし魔法の時間差発動も既に完璧なのでは？」

「否……やはりまだ精度に不安がある。あの時だって実際に発動できたかどうか……。」

やや駆け足で進む中、カンヘルがふとルシファアに投げかけた。

それは戦闘の際、アランディアが魔法の重複発動と認識していた事象についてであった。

魔法の時間差発動。

ルシファアは長い修行の中で魔法の絶対原則に挑戦していた。

魔法は魔力というエネルギー、心という拠所、詠唱という契約、精霊の力の使役という四つの要素によって構成されている。

そして魔法は絶対的前提条件として、同時に発動できるのは一つの魔法に限られる。

原因は長きに渡り不明とされているが、魔法が精霊の力を用いる以上、そこに謎を解く鍵があると考えられる。

魔法の発動はエネルギーである魔力に対して心で働きかける事で発動する。

これが詠唱を破棄する事が出来る所以でもある。

詠唱はあくまでもその履行を潤滑に行うための契約であり、当然用いなければより多くの魔力を必要とする訳だ。

そこでルシファアがまず想定したのが、魔法の発動保留の可否である。

ルシファアは魔法の重複発動が不可な理由として精霊に魔力への

独占性がある為と考えた。

これはつまるところ一個人が魔法の発動時に放出する魔力を精霊が独占する事により、次に別の魔法を発動しようとしても先程の精霊との間に魔力のパイプのようなものが結ばれているため、重複の発動が不可能になるという事だ。

結果として無意識的にそのパイプを切断し、新たにパイプを設ける形で別の魔法が発動される訳である。

これを打開する為にルシファーが考えたのが、魔法の発動保留である。

一度心中で詠唱を行い、それを拠所として魔力と精霊のパイプを締結する。

本来であればこの時点で魔法は発動されるが、この瞬間でルシファーは魔力の放出を一切行わない。

突如としてエネルギーの足りない状態になり魔法は発動しないが、理論的には魔法が発動されている状態になる。

これがルシファーの考え出した魔法の保留状態である。

簡単に思える話ではあるが、実際に魔力を的確にぎりぎりの所で止めるという行為は非常に難しく、類まれな才能を持つルシファーでさえも確実に可能とは云い難かった。

そして何とか魔法の保留状態を作り出し、ルシファーは別の魔法を発動する。

本来であればこの時点で保留状態の魔法が崩壊していてもおかしくは無いが、保留状態にある魔法は既に発動済みとみなされる。

続いて保留状態にあった魔法に対して再度魔力を放出する事で魔法の重複発動のような事象が成立する。

この際も保留状態にあった魔法は既に発動済みの魔法であり、崩壊する事無く発動する。

ルシファーの想像は概的を射ていたようで、ルシファーは長い修行の中でこれを会得することに成功する。

とは云ってもルシファーが述べたように精度には不安があり、完

壁に遂行できるとは云い難かった。

何れにせよ、歴史上初めて魔法の絶対原則の壁を越えた事は明らかであった。

恐らく広い世界を見渡してもこれと同じことが可能な者はいない。膨大な魔力とそれをコントロールする才、そして想像の壁を超え実際に成し遂げる遂行力。

どれをもつてしてもルシファーであったからこそ出来た事であった。

「それでもルシファー様はすごいにゃ。」

ルシファーの前に行くニヤルが振り返って笑顔でそう述べた。

言葉では謙遜しつつもルシファーは実際に成し遂げた。

困難であった状況下、短い時間の中で可能な最善策を導き出し、それを完璧に遂行してみせた。

(ええ。私は信じていましたとも。)

カンヘルは任せてくれと云ったルシファーの表情をしっかりと覚えていた。

あの時はまだルシファーの脳裏に魔法の時間差発動の策は無かった事は容易に想像できた。

ルシファーはそれでも尚任せると云った。

カンヘルも想定を超えた事態の悪化に対して、動揺が無かった訳ではない。

それを切り抜ける事が出来たのは、ルシファーの言葉によるものが大きかった。

それはニヤルも同様であった。

「そんなことはないさ。それよりも先を急ごう。いつ敵の追っ手がやって来るかわからない。」

ルシファーの表情は心なしに晴れやかであった。

それは経験したことの無い危機を乗り越えた達成感からであろうか、或いは仲間たちからの言葉によるものであるだろうか。

いずれにせよルシファーの言葉通り、ゆっくりしている時間は無

い。

この先可能な限り接敵は避けていきたい。

その為にはまず、再び差し向けられるであろう追っ手から出来る限り遠ざかることが必要であった。

朝陽の射し込む森をルシファア達は駆けるペースを速め、一路北へと向かった。

しかしその背に確実に新たな危機は迫っていたのであった。

007 (前書き)

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。
指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

(アランディア……。遅かったか……。)
ルシファー達とアランディア達による戦闘が終結してから二刻程経過していた。

アランディアらの亡骸は無残にも残されたまま、既に森の虫達が蝕み始めていた。

「腕章とプレートだけ外して、手分けして埋葬してやろう。」

屈強な騎士は騎馬を降りてアランディアの傍に近寄る。

彼の名はイシュバランケ。

聖戦連合軍 における役職は ゴルジディアンの森 駐留軍第一分隊長。

アランディアの上官にして駐留軍の第一分隊長を務めるほどの実力者であった。

イシュバランケはつけていた兜を外すとアランディアの脇に膝をつく。

兜の下の褐色の肌には歴戦の証を示す大きな傷で片目が失われていた。

「くっ……。あれほど注意しろと云ったのに……。判断を焦りおつて。」

悔しさに滲む顔を浮かべ、地面を強く叩き付ける。

残された片目から一筋の涙が零れ落ち、周囲を囲んでいた兵達も悔しさを滲ませた。

ルシファー達にも戦う理由があうように、彼らにもそうしなければいけない理由がそれぞれにある。

国家情勢、貧困、飢餓、格差。

人間たちが国家という体制を築いたことによる弊害は数えればきりが無い。

富める者はより豊かに、貧しいものはより貧しく。

それを打開する意味をもって人間たちは魔族領域への侵攻を進めている一面もあった。

イシュバランケはアランディアの付けていた駐留軍第一分隊副隊長の腕章とネームプレートを外すと内ポケットに忍ばせた。

周囲を取り囲んでいた兵達もそれに倣う。

「さあ、穴を掘って埋めてやろう。」

腕章とプレートを外し終えた兵達は手分けして墓穴を掘り始めた。一人を埋める穴を掘るといいうのは意外に大変だ。

そしてそれ以上に仲間の墓穴を掘るといいう行為は、いくら死を覚悟して戦地に赴く戦士であっても辛いものがある。

だが彼らは気丈に、淡々と穴を掘る。

「埋葬が終わったら、一度本陣に帰還する。」

「敵を追わなくていいんで？」

「闇雲に探しても追いつけない。一度本陣に帰還して作戦を立て直す。」

イシュバランケの云うとおりであった。

彼は監視の意味、あわよくば足止めを込めてアランディアに追っ手の役を任せた。

だがそのアランディアが討たれた以上、ルシファー達の所在は簡単には掴めない。

尚且つ敵の正体が掴めない状況で動いても、アランディア達の二の舞となる。

(同じ轍を踏むものか。)

しかもイシュバランケはアランディアの実力を相応に評価していた。

そのアランディアがこうも無残に敗北しているとなると、十や二十の兵で立ち向かった所で簡単にはいかない。

その点を考慮しても一度作戦を練り直し、本格的な討伐隊を組み直す必要があった。

「さあ、ぼやぼやしてる暇は無いぞ。こいつらの仇を討つんだ！」

イシュバランケの声に叱咤され兵達は再び穴を掘り始めた。
初夏の風が森を吹き抜け、太陽の光が射し込む。
かつての 古種ゴブリン族 の聖地に吹き抜けるのは、死者の魂
を慰めるに相応しい清らかな風と光であった。

夜風が木々の間を吹き抜け、月明かりがルシファー達を照らす。
アランディア達との戦闘を終結したルシファー達は一度も休憩を
取らぬまま、北を目指し走り抜けていた。

朝方に戦闘を終えたことを考えれば、相当な距離を踏破した事になる。

「ルシファー様！……ルシファー様ッ！」

ルシファーの後方を走っていたカンヘルが呼びかける。

「どうした？」

「少し休みましょう。このままではとても持ちません。」

彼らは裕に五里以上の距離を進んでいた。

お互いの表情にも明らかに疲れが見て取れ、既に体力の限界は近い。

激しい戦闘を終え、一日中走っていたのではいくら身体能力に優れる彼らと云えど無理があった。

ルシファーもそれが理解できないわけではなかった。

事実、彼自身も相当に体力を消耗しており、一時的な休息を必要としていた。

（しかし……。）

決して口には出さなかったが、彼は内心焦っていた。

一つはいつ追ってくるとも分からない敵の存在。

そしてもう少しでこの ゴルジディアンの森 を抜けられるという事実。

この二点からルシファーとしては一刻も早く モンスローン山道

へ到達、可能であれば ウインビーンの森 に抜きたいと考えていた。

ウインビーンの森 にさえ到達できれば、そこから僅か三里程の距離にサンジェルマン公爵の屋敷がある。

その距離であれば夜中のうちに ウインビーンの森 にさえ入れれば、明日の内に屋敷に到達できる。

そこまで至れば追っ手に追いつかれる可能性はぐんと低くなる。

(しかし……そろそろ限界か。)

ルシファアの前を走るニヤルは先ほどから索敵を目的とした感覚強化魔法を展開している。

後ろからでは判断できないが、相当に体力を消耗している事が容易に想像された。

カンヘルも今朝方の戦闘で相応に魔力、体力を消耗しており無理は出来ない状態であった。

モンスローン山道 へはもう一里程の位置まで至っていたが、今日はここで休むことが得策であった。

「よし。ニヤル、カンヘル、今日はここで休もう。」

前を走っていたニヤルが声に反応して足を止める。

「……うーん、疲れたにゃあ。」

膝に手をつけてニヤルが呟いた。

それから両腕を上げて背を伸ばす。

(ちよつと焦りすぎたか。)

ルシファアは内心、ニヤルとカンヘルに対して申し訳無さを感じていた。

そもそもアランディアと対峙する事になった原因は不可抗力とはいえルシファアにあり、注意を怠らなければ防げた戦闘であった。

戦闘に発展しなければ、二人ともここまで疲労を感じることは無かっただろう。

その上ここまで強行的な旅路を取らせてしまっただけは旅の主役たるルシファアの責は重いと云わざるをえない。

「二人ともここで今日の寝床の準備をしていてくれ。俺は何か狩ってくる。」

「それなら私が。」

「いや、今日は二人とも疲れているだろう。少し休んでいてくれ。」

「……そうですか。」

今ルシファーに出来ることは多く無い。

回復魔法を唱えたところで、体に蓄積された疲労は取れても心で抱えている疲労感は拭えない。

それならばまずは腰を着いて休むに越したことは無い。

三人が立ち止まったのは木々が少なく、僅かに星空が覗ける場所であった。

月明かりが程好く射し込み、警戒しつつ休息を取るには適していた。

「それじゃあ行ってくるよ。荷物を預かっていてくれ。」

ルシファーはそう云うと背負っていたザックをカンヘルに渡し、再び木々の中へ入っていく。

残されたカンヘルとニヤルはお互いに顔を見合わせ、どこかぎこちない雰囲気醸し出す。

辺りでは虫たちが美しい音色を奏でていた。

「行ってしまわれたな……。」

沈黙に耐えかねたカンヘルがニヤルに話しかける。

ニヤルはその声を無視して顔を下に向けると薪に使えそうな枝を拾い始めた。

「カンヘルはどう思ってるにや?」

「どうって?」

「ルシファー様の様子……なんかおかしいにや。」

「……。」

「焦っているというか……落ち着きが無いというか……。」

「……。」

「あああ!なんか云えにや!!--」

ニヤルは枝を拾う手を止めてカンヘルの方を見上げた。
対するカンヘルは神妙な面持ちで何かを考え込んでいた。

「……きつと今朝方の事を悔いているのでしょうか。自分が不甲斐無
いばかりに……余計な気苦労をかけてしまった。」

「それは……。」

「いいえ、きつとそうです。私のすべてを信頼して、任せていただ
けたのならあなたに不安な顔はされないはず……。」

「それならニヤルだって……ニヤルがもつと強かったら……。」

二人が考えていた事はルシファーが考えていた事と同じであった。
皆それぞれに自らの不甲斐無さや無力さを痛感し、今朝方の戦闘
に対して責任を感じていた。

傍から見れば可笑しな話だった。

ルシファーは自らの不注意で二人を戦闘に巻き込んでしまった事
を悔い、カンヘルやニヤルはそれを個の力で解決できなかった事を
悔いている。

個として旅の仲間達にもつと貢献したいという思いが交差してい
る。

本来、組織としては感じる必要の無い個による悔いの心が個を高
めていく事もある。

彼らは今まさにその道程に居るのかもしれない。

「だけどにゃ……それはニヤル達が考えちゃいけないことなの
にゃ。」

「と云いますと?」

「だってカンヘルはちゃんと役目を果たしたし、ニヤルも自分が出
来る事を精一杯やったのにゃ。それでもまだ足りにゃいって事はこ
れからもつと強く、もつと頑張るしかないのにゃ。だから今それを
悔やんじやだめなのにゃ。」

カンヘルはニヤルの言葉に感服していた。

時折見せるニヤルのこういった感性は基本的に理詰めで生きてい
るカンヘルやルシファーには欠けている部分であった。

確かに今の彼らに必要な事は悔いる事ではない。

今の彼らはただ前に進む事だけを考え、そのために必要なら必要なだけ強くなるしかない。

(このカンヘル……不覚にもニヤルに気付かされましたね。)

カンヘルは視線をニヤルに向けると深く頷いた。

「なっ……なにニヤニヤしてのによ!？」

ニヤルは不意に頬を赤らめ、カンヘルを蔑視の眼差しで見つめた。どうやらカンヘルは自分でも気付かない内ににやけてしまっていたらしい。

「いえ、べつに。」

「なんにや!？気持ち悪いから云えにや!！」

「気持ち悪いとは失礼な!まったくだからチビ猫殿は……。」
カンヘルはやれやれと大げさに両手を広げて見せた。

「にや、にや、にやによおお!？このでくの坊!！」

ニヤルは間髪入れずに立ち上がるとカンヘルの頭部目掛けて打点の高い飛び膝蹴りを繰り出した。

カンヘルはそれをひらりとかわすと今度は意図的ににやりと笑ってみせた。

「フツ……そんなものではまだまだですな。フツ。」

「にやにやにやああ!！」

ニヤルはその頬をさらに赤らめカンヘルに掴み掛かった。

月明かりが射し込み大小二つの影を作り、笑みを含んだお互いを罵倒する声が森に響いた。

二人を囲むように生い茂った木々の葉は風に舞い、心なしかカンヘルとニヤルのやり取りを楽しんでいるようにさえ見える。

その木々の内の一本の背後にルシファアは身を隠していた。

早々に森兔を仕留めたルシファアは途中から木陰で二人の話を聞いていた。

そして考えていた以上に頼もしい仲間達の様子を見て、自分の悔いていた事が急に小さな事に思えていた。

(俺は良い仲間恵まれたな……。)

仕留めた兎の耳を掴み佇むルシファーは一人そんな事を思い、少しだけ微笑んだ。

(もう少しだけ二人きりにしておこう。)

ルシファーはそう考えたが、彼自身もよく分からない寂しさに包まれた。

それでもその寂しさは気分の悪くなるものではなく、どこか心地よい感覚であった。

三人を襲った危機もこれから襲い来る危機も、今の彼らならきつと立ち向かえる。

そう彼ら自身にも思わせるのにこの夜は充分過ぎる程だった。

何れにせよこんな所で悩んでいる余裕なんて無いのだ。

朝になれば彼らの旅路はまた始まる。

008 (前書き)

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点が在るやもしれません。
指摘していただければ嬉しいです。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のもので。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

森の朝靄は視界を遮るほどに深い。

持っていた黒パンと兎肉に塩を振るって焼いただけの簡素な晩御飯であつたが、一日中走り続けた彼らには充分なご馳走だつた。

早々に兎一頭を平らげた三人は例によつて見張り役を立て、日の出前の出立を予定して眠りについた。

最後を担当したルシファーはカンヘルから異常が無かつた旨を聞いていたが、前日の反省を活かして定期的に感覚強化の魔法を発動し警戒に当たつていた。

(初夏でも朝方は冷えるな……。)

湿度の高い森の空気は驚くほど冷たく、ルシファーの指先はやや冷たくなつていた。

寒いと感じる程ではないが、じつとしたまま動かないでいれば相応に冷えを感じられる。

(そろそろかな。)

木々の合間を縫つて少しずつ朝陽が射し込んできた。

幸いにも敵の気配や足音を察知する事は無く、当面の安全を期待しても良さそうであつた。

ルシファーはカンヘルとニヤルを足下に見下ろす位置にある木の枝から飛び降りた。

控えめな落下音が鳴り響き、土埃が舞い上がる。

「……そろそろ時間でしょうか？」

音に目を覚ましたのか、カンヘルは眩しそうに瞼を抑えながらルシファーに尋ねる。

「すまない、起こしてしまつたか。そろそろ朝食の準備をしようと思つてな。」

「それでしたら私が。」

カンヘルは素早く上体を起こしてルシファーの方に向き直した。

「そうか、ならお願いするよ。」

「御意。」

カンヘルはザックからある物を取り出した。

「カンヘル、お前……そのハム!？」

ルシファアはカンヘルが取り出したハムに見覚えがあった。

「ええ、トウイーニー殿お手製のハムにあります。無理を云って作って頂いたんです。」

トウイーニーの料理の腕はルシファアのみならずカンヘルやニヤル、果ては村の住民の間でも評判になっていた。

なにせ魔王城後宮勤めで魔王子付きのメイドとして日夜、家事をこなしてきたわけだからその腕前は並みの料理人を遥かに凌駕している。

それどころかハムやベーコン等の加工食品の精製やハーブや果実の栽培など、トウイーニーにかかれば家の事は大抵済んでしまう。

突如村にやってきたトウイーニーとルシファアが住民達にすんなり受け入れられたのも、彼女の一流のメイドとしての気立ての良さがあつた事は云うまでもない。

そんな彼女の作るハムは村でもとびきり美味いと評判で、毎週のように精製の依頼が来る程であつた。

無理を云って作って頂いた、というのもそんな村の住民達の依頼の合間に手間を増やす事を謙遜しつつ、それでも頼んだという事情があつた。

「確かに……トウイーニーのハムの味が恋しくなっていた気がするな。」

「でしよう? さあ早速火にかけましょう。」

(だが……カンヘルめ、今の今まで隠しておいたな……。)

という気持ちは言葉にせず、ルシファアはハムを捌くカンヘルの手元を見つめた。

脂の乗った上質な肉から作られたであろう手製のハムは淡い桃色に輝いて見える。

カンヘルは贅沢にも手の親指大ほどの厚切りに捌いたハムを火にかける。

脂の乗ったハムはバター塗られた鉄鍋の中で踊るように舞い、焼けていく。

すると芳ばしい肉の香りが辺りに立ち込める。

野生動物の生肉が焼ける匂いとは違い、芳醇な甘みさえ感じられる香りであった。

「……にゃ……にゃんか……いい匂いがするにゃ。」

どうやら香りにつられてニヤルも目を覚ましたようだ。

臉を右手で擦りながら上体を起こした。

「にゃ！？トウイーニーのハムの匂いがするにゃ！」

(こいつ……匂いで分かるのか！？)

カンヘルは驚嘆し、そして呆れた。

ニヤルの嗅覚は確かに優れているが、よもやここまで敏感に反応するとは思ってもみなかった。

「ニヤルは匂いで分かるのか？」

ルシファアは何食わぬ顔をしてニヤルの顔を覗き込んだ。

「トウイーニーのハムは特別なのにゃ！」

ルシファアは太陽のような笑顔を浮かべた黒髪猫耳の少女の云っている事の意味がよく分からなかった。

ただその純粹無垢な笑顔を前にしてこれ以上の詮索は断念した。

(……食べ物に関しては昔から口煩かったですが……恐るべしチビ猫殿……。)

カンヘルはそんな事を思いながらニヤルの鼻を注視したが、小さく整っているという以外に幾分変わった点は無かった。

「……何見てるのにゃ？」

カンヘルの視線に気付いたのかニヤルが尋ねた。

「いえ、別になんでもありませんよ。」

(まさかまた……。)

ルシファアの脳裏に昨日のデジャブが再生される。

「なんでもないって……じゃあなんで……。」

「カンヘル、そろそろ焼けたんじゃないか？」

ルシファアはニヤルの声を遮るように敢えて大きめの声でそう云って、カンヘルの手元を指差した。

「えっ？ああ、そうですね。いい焼き加減です。」

幸いにもニヤルの声はカンヘルの耳にはそれ程伝わっていないようだった。

当のニヤルもハムの香ばしい匂いに釣られて先程まで云おうとしていた事を既に忘れ、虎視眈々とハムに狙いを定めている。

どうやら彼女の眼力から察するに三枚に分けられたハムの中に意中の一枚があるらしい。

常人の理解力では到底及ばない域にニヤルの至高はあった。

「ニヤルはその右側の奴がいいにや。」

「えっ？ああ……はい。」

カンヘルは不思議そうな顔をニヤルに向けつつもその言葉に頷く。そしてザックから黒パンを取り出して食べやすいサイズに切り分け、その上にハムを乗せていく。

ニヤルは思わず喉を鳴らさずにはいられない。

「いったきまーすにや。」

「いただきます。」

「それでは私も。」

三人はほぼ同時に黒パンにハムを乗せただけの簡素な朝食を口へと運んだ。

「美味しいにや。」

「ああ。美味しいな。」

「そうですね。」

だがその味は簡素という表現が似つかわしくない程に美味であった。

同時に彼らは思い出していた。

旅が始まって僅か三日目にして故郷に待つ相手の存在を。

トウイーニーというかけがえの無い存在がいるという事を。

そして必ず帰るといふ約束を果たすべく、これから立ちほだからであるう困難を乗り越える強い意志を再確認出来た。

そういつた意味ではこの僅かな休憩が彼らに与えた物は、彼らが思っていた以上に大きかったと云えよう。

朝靄の立ち込める森に僅かながら幸福な一時が訪れた朝であった。

朝食を終えたルシファー達は身支度を整え、一路、森の北端を指していた。

「ルシファー様、まだ聞いておりませんが、どの様にして モンスローン山道 を超えるおつもりですか？」

ルシファーの後方を進むカンヘルが、前方を駆けるルシファーの背を目掛けて話しかけた。

「すまない。もう少し考えさせてくれ。」

モンスローン山道 は人間達にとって物資や兵員の運搬を行う上で最も重要な経路の一つとして整備されていた。

というのも南北を ゴルジディアンの森、 ウインビーンの森 という広大な森に挟まれている立地は、兵や物資を西の最前線に届ける上で最も安全な行路と考えられているからである。

ゴルジディアンの森 は元来 古種ゴ布林族 の聖地として栄えた地であり、森のいたる所に未だに 古種ゴ布林族 やゴ布林族 の隠れ家が点在している。

最前線が ゴルジディアン山脈 の麓に移行した現在でも、度々ゲリラ戦が繰り広げられている為、補給路としては安定しない。

ウインビーンの森 は人間達にとってまだまだ未開の地が多いばかりか、調査員が行方不明になる事件が頻発している。

その為、人間達にとって モンスローン山道 は非常に重要な補給路になっている。

当然、道中には防衛のための拠点や見張り櫓、物資倉庫などが点在し、多くの兵員も駐在している。

そこを通過するとなると接敵の危険度も大きく上がる。

ルシファーとしては比較的発見され難い夜間に強行突破するつもりでいたが、前夜の内に通過することは叶わなかった。

となると再び陽が落ちるのを待つという手もあるが、それはそれで迫り来るであろう追っ手に対して余りに無謀であると云える。

それ故ルシファーは新たな策を見出さなければならず、自ずとその表情は難しくなっていく。

「強行突破は難しそうにゃ……。」

先頭を駆けるニヤルが少しだけ振り向いて告げる。

その言葉が意味するのは感覚の優れたニヤルが多くの敵の存在を認識しているという事であった。

「そうか……。」

ルシファー達は ゴルジディアンの森 の北端、 モンスローン山道 までおよそ半里の所まで到達していた。

このままでは無策のまま モンスローン山道 に突入する事になる。

たとえ戦闘に発展したとしてもルシファー達が敗北する可能性は皆無に等しいが、それでも敵の数を考えれば相応の痛手を被る事は必至だ。

「兎も角、まずは森の端まで急ごう。そこから先は山道の様子を見てから決めよう。」

ルシファー達にとって最悪の事態は恐らく精鋭、或いは大人数で構成されているであろう追っ手に追いつかれれる事である。

現時点では幸いにも追っ手の気配は確認できていないが、それであつても先を急ぐに越した事はない。

ルシファー達は今一度、その歩みを早め モンスローン山道 を目指す。

しかしその背後には着実に敵の手が迫っていた。

（雲行きが怪しくなってきましたね……。）

最後尾を進むカンヘルは木々の隙間から見える空を見上げた。

先程まで澄み切っていた空には少しずつ灰色の雲が立ち込め始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5383y/>

魔王子復讐記

2012年1月3日05時46分発行